
Ring Of Solomon ~ The Last Judgement ~

amin

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Ring Of Solomon \ The Last Judgment

【Nコード】

N5646V

【作者名】

amin

【あらすじ】

悪魔を使役することができる指輪をひょんなことで手に入れた平凡な高校生「拓也」は、指輪の継承者とされてしまう。そして何者かに召喚されてソロモン72柱と呼ばれる悪魔が現代に召喚されてしまう。悪魔たちを地獄に戻すために、拓也はソロモン72柱の悪魔の1匹「ストラス」と悪魔退治をしなければならなくなる。そしてそこには策略を巡らす天使の姿があった。

Ring Of Solomon \ from the under

w o r l d の続編で、シリアス中心の現代ファンタジーです。
前作を讀んでいなくても大丈夫です。

第0話 前作のあらすじ（前書き）

完全な続編だから前作読んでないと、とっつきにくいと言つご意見を頂いたので急遽前作のあらすじを作りました。

これで多分、前作を読む必要はなくても話は分かると思います。ご意見有難うございました。

第0話 前作のあらすじ

主人公の池上拓也は都内の高校に通う平凡な高校生だった。ある日、拓也は親友の頭脳明晰で金持ちの広瀬光太郎と期末テストが終わった日に遊んで帰り、その途中シルバーアクセサリーの店で処分される事から50円になっていた指輪を買う。

しかし家に帰り、その指輪をはめた所、外す事が出来なくなってしまう。

幼馴染の少女、松本澪と試行錯誤で指輪を外そうとするが、外す事が出来ない。途方にくれた瞬間、指輪から1羽のフクロウが飛び出してきた。フクロウは自らをソロモン72柱の悪魔ストラスと名乗り、拓也を勝手に指輪の継承者と認めてしまう。その時に、その指輪が悪魔を使役することが出来るソロモンの指輪だという事を知る。

そして指輪の継承者が現れた事により、ソロモン72柱と呼ばれる地獄の中でも上位の悪魔たちが何者かの手により全て現代に召喚されてしまう。このままでは悪魔達は人間達への虐殺行為を繰り返すという事をストラスに聞かされ、指輪の主である拓也が悪魔達と戦わなければならないと告げられた。

信じられない事態に拒む拓也だったが、高校のクラスメイト、明るく元気な高校球児の中谷章吾がソロモンの悪魔ヴォラクと契約をした事により事態は急転。悪魔と戦う事になった。

ソロモンの指輪には天使の魔力が宿っており、その指輪に念じる事により、様々な魔法を使うことが可能。拓也も指輪と、天使ウリエルから授けられた“浄化の剣”を用いて悪魔と戦う。そして辛くもヴォラクを倒す事に成功した。

しかし戦闘に向いていないストラスだけでは不安になった拓也はポディーガードとして双頭の竜を操り、巧みな剣さばきを持つ少年の

姿の悪魔ヴォラクと契約をする。

ヴォラクは光太郎の父親が仕事で借りているが、全く使っていないというマンションで生活する事になる。

そして世界中を一瞬で飛び回る事のできる神速のペガサスを持つ黒い長髪で忠誠心の厚い青年の悪魔セーレ。

相手に自分への恋愛感情を植え付け好きに操れ、本人も美しい容姿を持ち、男と女、両方自在に変身できる青年の悪魔シトリー。

ヴォラク以上の剣の使い手であり美しい女性の容姿だが口がきつい青年の悪魔パイモン。

狙った所に爆発を起こす力を持つ少女の悪魔ヴァル。

これらの悪魔を仲間に取り入れ、自分達を狙うソロモンの悪魔と戦う事になる。そして色々な偶然が重なり、拓也がストラス、セーレ、パイモン。漣がヴァル。光太郎がシトリー。中谷がヴォラクと契約をする事になる。

ソロモンの悪魔と戦う際に目の当たりにする契約者の願い。嫉妬、羨望、絶望、狂気、悲劇……それらは確実に拓也の心に深い傷を残す事になった。そして拓也はギリシャで悪魔と契約をし、殺人事件を起こしていたシャネルという少女を殺害。初めて自らの手で人を殺してしまう。

絶望し、泣き叫ぶ拓也を皆が励まし、仕方が無かった事だと言った。しかし拓也の心の傷は深く、それでも止まる事が出来ない現実に崩れ落ちそうになりながらも、殺してしまった少女の為に、悪魔と戦い続ける事を誓う。

しかし悪魔の襲撃は終わることなく、拓也の親友である広瀬光太郎は悪魔と契約をした幼馴染である少年によって命を奪われる。その幼馴染も悪魔による契約の等価交換により、足の健を切られ、二度と歩けなくなる重傷を負った。

悲しみにくれる拓也に出された課題は光太郎を蘇生させる為にソロ

モン72柱の悪魔の一匹、フォラスを探す事。フォラスの能力が死んだ相手に寿命を送り込んで生き返らせると知った拓也達はフォラスを探しに契約者がいるという大分県に向かう事になる。

そこで出会った高校生“光”がフォラスと契約しているのを知り、協力を要請。いざこざはあったが、光の協力を得て、光太郎を生き返らせることに成功する。

しかしそこで“最後の審判”を知る事になる。

最後の審判とは悪魔と天使の世界創生をかけた戦争の事であり、人類の滅亡でもあった。人類は一度滅亡し、最後の審判で勝利した方が無になった世界に、新しい秩序を作る。

その最後の審判が近々起こるといふ事を光に断言され、拓也達は最後の審判を止める決意をする。

しかし指輪を手に入れてちょうど1年目。高校2年生になった拓也の前に現れたのはソロモン72柱の悪魔ザガン、レラジエ、アンドラス、フォカロールだった。四匹は地獄の王である魔王ルシファーから直接命令を受け、拓也を地獄に送る為に迎えに来た。ザガンとレラジエは倒すことが出来た拓也だったが、アンドラスにより衝撃の事実が伝えられる。

自分たちが拓也を狙う理由は“サタナエル”と言ふ悪魔を復活させる為だと言ふ事。最初は意味が分からなかった拓也だったが、アンドラスの話によって現実を思い知らされる。

サタナエルは地獄最強の悪魔で、前回の最後の審判で悪魔が敗北した際に天使達により封印され、今も目を覚ましていない。その復活の為にサタナエルは天使たちに封印される際に、自らの力の一部を拓也が継承した指輪に仕込んでいた。

拓也が地獄でサタナエルを封印している水晶をサタナエルの力で融解させることが出来れば、自分の力に反応し、サタナエルは目を覚

ます、と言う事だった。しかしサタナエルの力は強大すぎて、拓也の体を蝕んでいった。つまり拓也は指輪を継承した事により、サタナエルの力に浸食され、悪魔になってしまった。

動揺しつつもアンドラスを倒す事に成功した拓也だったが、現実を受け入れることが出来ず、なんとかして悪魔から人間に戻る方法を探さなければと決意する。だがフォカロルの襲撃により敗れ、拓也の友人である中谷は殺され、拓也は地獄に送られてしまった。

しかし中谷は優秀な魂だった為、天使として天使たちの世界“ヴァールハラ”に送られてしまう。そこで待っていたのは異端審問。中谷は自分を庇ってくれた天使ウリエルとラファエルのお陰で、異端審問での無実を証明する事に成功。ヴァールハラにある9つの階級の1つ第5階級力天使ヴァーチャヤズに配属される事になった。

一方、生き残った光太郎と漣は意気消沈していた。しかしストラスから漣が悪魔と何かしらの関係があると言う話を聞き、漣について調べだす。しかし調べている間にソロモンの悪魔であるバティン、マルコシアス、キメジェスが襲撃を仕掛けてきた。

そこで分かった事が、漣の祖父はイギリス人であり魔術結社に所属、日本人女性と恋に落ち、魔術結社と縁を切り日本に亡命したという事実と、漣の遠い先祖はサラと言う女性であると言う事だった。

バティン達は裏切り行為を働く可能性のある悪魔の動きを封じる為に、サラの子孫である漣を地獄に送る為に襲撃してきたのだ。

しかし襲撃は失敗に終わり、三匹は一度身を引いた。

その頃、地獄に連れて行かれた拓也は魔王ルシファーや、7つの大罪と呼ばれる悪魔、地獄の王の称号であるサタネルの称号を持つ悪魔たちと出会う。

そこで待っていたのはサタナエルの力と完全に融合する為の拷問にも似た訓練。逃げる事も許されず、待っているのは痛みだけ。それ

でも拓也は望みを捨てず、地獄を脱出する方法を模索する。そんな中、アスモデウスと言う一匹の悪魔に出会う。彼は過去に人間の世界に召喚された際、人間の女性と恋に落ちた悪魔だった。その女性がサラであり、サラの子孫の漕を最後の審判から救う為に、アスモデウスは拓也を地獄から脱出する事に手を貸す。その途中で自分が殺してしまったシャネルに出会い、彼女とも和解した。

脱出は簡単な物ではなく、サタネルの称号を持つ悪魔たちが次々に襲撃を仕掛けてきた。その悪魔の1人のサマエルから拓也はとんでもない事実を聞く事になる。

拓也の先祖は天使だと言うのだ。

ソフィアと言う天使が悪魔を産み、ヴァルハラを追放され、人間界で1人の青年と恋に落ち子供を生んだ。その子供の子孫が拓也であり、ソフィアがヴァルハラを追放される原因の悪魔の子供がサマエル。つまり2人は血の繋がった兄弟だった。

ソフィアは悪魔を産んだ事から、天使ながら悪魔のエネルギーも体内に宿す体を持ち、その事から拓也は天使と悪魔の血を受け継いだ人間だった。

その事実を知りながらも、サマエルとの戦いに勝利した拓也達は先に進む。しかし人間界に後一步で戻れるという時に7つの大罪の悪魔サタンが襲撃してきた。サタンはアスモデウスと親友関係にあり、自分を裏切ったアスモデウスに激怒、和解に応じなかったアスモデウスを殺そうとしたが、間一髪で人間界に戻る事に成功する。

その際、拓也は殺される可能性が高い事からアスモデウスも人間の世界に連れて行った。

そして家族や友人達と再び再会した拓也は喜びを噛み締めながらも、悪魔になってしまった現実に絶望し、それでも最後の審判を止める為に戦う事を誓った。

設定

前回の最後の審判に勝利したのは天使だった為、天使は人間の世界を自由に行き来できるが、悪魔は人間に召喚して呼び出されない限りは行き来は基本不可能。

悪魔は人間の世界で生き続ける事が不可能な為、人間に自分の心臓とも言える契約石と言う宝石を渡し契約し、契約者からのエネルギーを契約石から吸い取る事で、存在を許される。しかし人間の魂を食べる事により、契約しなくても一時的にエネルギーを蓄え行動する事は可能。その場合はエネルギーが無くなる度に人間を殺し、エネルギーを採取しなければならない。

契約石を受け取った時点で契約関係になり、等価交換の元、契約者と悪魔の契約条件を決める。

契約：基本は等価交換で、契約者の望みに相応の物を悪魔に還元しなければならない。しかし絶対ではなく、悪魔によっては見返りを求めない者もいれば、高すぎる代償を求める者もいる。

しかし恩恵を受けたのに契約者が見返りを渡さない、契約条件を守らない等の行為をした場合は“契約の不成立”がなされ、ペナルティとして契約者の命と人生で採算を取る事になる。人生と言うのは契約者が生きてきた証全てを奪われる事、つまり契約者の存在自体が全ての人間の記憶から無くなってしまう。

しかし他の契約者、悪魔はその記憶を失う事はない。稀に普通の人間でも記憶を失わないことがある。

契約石：悪魔の心臓とも言える宝石。これを受け取った者は悪魔と契約したという事になる。この宝石を介して、契約者のエネルギーを貰い、悪魔が活動することが出来る仕組みになっている。

しかし契約者と悪魔が距離的に離れすぎると、契約石からエネルギーを貰えなくなる。また契約石が破壊されると、悪魔は心臓を破壊されたのも同じ、人間界では生きることが出来ず、砂になって死んでしまう。その事から契約石には結界を常に張る悪魔がほとんどで、契約石が壊される事は滅多に無い。

ヴァルハラ…天使たちが住む世界。1～9の階級に分けられており、天使長はミカエル。本編でも説明するので省きますが、気になる方は第1部の番外編「中谷のヴァルハラ散策」を読んでください。

7つの大罪…傲慢、憤怒、暴食、強欲、怠惰、嫉妬、色欲をそれぞれ司る七匹の悪魔。地獄でもリーダー的存在。傲慢がルシファー、憤怒がサタン、暴食がベルゼバブ、強欲がマモン、怠惰がベルフェゴール、嫉妬がレヴィアタン、色欲がアスモデウスである。

サタネル…地獄の王を意味する称号、巨大な悪魔に与えられる称号でもある。

アザゼル、ラハグ、マステマ、アバドン、モレク、サマエル、ベヘモト等がいる。7つの大罪にもソロモン72柱にもサタネルの称号を持つ悪魔は数匹いるが、小説のメインは上記に悪魔達です。

第0話 前作のあらすじ（後書き）

キャラクターの設定の詳しい物はブログにアップしていていますので、
気になった方はご覧ください。

見ても見なくても支障は無いと思います。

第1話 再び訪れた世界に

ずっと欲しかった物があるんだ。

完全な力なのか、自分が支配する世界なのか、天使共が滅亡していく姿なのか、挙げればキリがないものばかりだけど、でもそんな物でもない気がする。

何が欲しいか分からないけれど、何かが欲しくて泣き叫びたくて暴れたい衝動に駆られる。

でもきつと拓也を手に入れれば完璧になれる気がするんだ。

だってあの子は僕の大切な子どもだから。

1 再び訪れた世界に

「拓也、気をつけてね」

3日という時間があっという間に過ぎ、世間で言うお盆も終わって高校の夏期講習が再開した。新しく買った携帯をズボンのポケットに入れて、母さんの見送りを背に学校に向かう。

久しぶりの学校、久しぶりの外の空気、なんだか全てが新鮮に感じる。おかしいな、ずっとずっとこの世界でしか生きて来なかったって言うのに。

ソロモンの指輪、これをうっかり手に入れてしまったおかげで偉い目に遭った。近くのシルバークセの店で処分するからって50円で売られてたんだ。何も考えずに指に嵌めたら抜けなくなっちゃって、ソロモンの悪魔ストラスが召喚された。

それからはさんさんだった。最終的には俺はサタナエルって言う地

獄最強の悪魔の力を受け継いだ事で、少しずつ人間から悪魔に変わって言ってしまうってると言うね……何とかして阻止する方法を考えなきゃ。絶対にあるはずだ。

でも今は高校生として久々の学校に通おう。夏休みの間は悪魔と戦って地獄に連れて行かれてたんだ。久々の平穏を楽しみたい。学校までの道のりが長くて、でもなんだか幸せに感じた。

「あ、遂に池上復活かよ！お前マジ大丈夫だったのか？」

クラスに入った俺にクラスメイトの視線が一斉に向かう。

少し気まずくて「おはよう」と小さな声で咳けば、桜井が指を指して大声を出した。

桜井の声を引き金にオガちゃんとかジャスト、立川や他のクラスメイト達が集まってくる。

「お前マジ風邪大丈夫だったのか？広瀬さえ連絡とれないって言ってたし、入院説まで流れてたんだぞ」

ああそっか、俺が地獄に行ってる間、俺は風邪をこじらせてる設定になってたって母さんが言ってた。心配してくれたみんなが有難くて、元気をアピールしたら皆は少しだけ安心した様な顔をした。

でも前より教室は活気がない。まだクラスの生徒全員が来てないからとか、そういうのじゃない。皆、どこそわそわしてるのだ。その原因は分かってる。

俺は中谷の席に視線を向ける。野球が大好きなクラスのムードメーカーで、俺の悪魔の事情を知って一緒に手伝ってくれていた友達。表向きは行方不明だけど、真実はソロモンの悪魔フォラスに殺された。

中谷の話はストラスから聞いた。ストラスが中谷の家族に報告して

ないって話も。最初は怒った俺も中谷が生きている可能性が高いと言っ話聞いて何も言えなくなっちゃった。生きてるって言うのは御幣があるかもな……中谷は殺されたけど、天界に天使として招待された可能性が高いらしい。悪魔と戦う為に。そして中谷を探しだして連れ戻す為には中谷の家族に真実を話して自らの行動に規制をかける訳にはいかない、そう言っていた。特に中谷と契約していた子供の悪魔ヴォラクが躍起になって中谷を探してるらしく、絶対に連れ戻すって意気込んでいた。

ストラスは俺がいない間、契約者として俺の弟の直哉と契約をしていたらしい。悪魔との契約がどれだけ危険か身を持って理解していた俺としては許せる話じゃないけど、直哉にとっては色々考えさせられる結果になったみたいだ。

再び悪魔の心臓でもあり契約の証拠でもある契約石を直哉から返してもらい、ストラス達の契約者は俺って言う形になったから良かったけど……とりあえず俺も中谷を探さなきゃならない。

そしてフォカロールをこの手で地獄に返さなきゃ……とりあえず学校にいる間は高校生という久々の生活を楽しむために、その考えはいつたん打ち消した。

学校も終わり、皆に手を振って光太郎と一緒にマンションに向かう。今日はストラスに呼び出されている。アスモデウスをどうするか、と言う話らしい。

俺としてはアスモデウスは命の恩人だ。無下に扱う事なんてできない。でも濶の話を知っているストラス達にとっては複雑なんだそうだ。

「拓也、上がって」

マンションについた俺と光太郎をセーレが出むかえる。俺と光太郎は軽く挨拶して靴を脱いで部屋に上がった。

アスモデウスはリビングには居なかった。リビングにいるのはパイモンとヴアルとストラスだけ。

セーレに聞いたらシトリーとヴォラクは中谷を探してる警察の状況を確認しに行っているみたいだ。このマンションがばれてないかなどの情報を。

ソファに座るように促されて、そのまま腰かけると、パイモンとヴアル、ストラスがこっちに視線を向けた。

「主、申し上げる前に事が済んだ事をまず詫びなければならぬのですが…… 溇がアスモデウスとの契約を決意しました。アスモデウスもそれに同意しています」

「は？」

「マジで？」

いきなりの事に理解できない俺と光太郎を余所に、パイモンは淡々と事後説明を進めていく。

正直アスモデウスは誰かと契約はするんだろうと思ってた。でもその相手は絶対に俺だって思ってたんだ。

それが溇？ いやアスモデウスは溇を守りたいって言ってたから確かに溇と契約する可能性もあった訳だけど、でも……

「ど、どっちが言いだしたんだ？」

「…… 契約を申し出たのは溇からの方です。アスモデウスは溇の申し出を受けた。もう主が何を言っても契約は変えられない。アスモデウスが従う相手は溇のみです」

「そんな……」

まだ契約を変えさせることは可能なのか？でも俺が何を言っても溇が同意しない限りは……まずは溇を説得しないと、いやアスモデウスを説得するべきなのか？

ぐるぐる回る頭で必死に考えるけど、何をどうしていいか分からない。

まずなんで溇がそんな事を言い出したんだ？なんでアスモデウスはそれを止めようって思ってくれなかったんだ！

「アスモデウスはどこにいるんだ？」

『セーレの部屋にいますよ。余程疲れていたんでしょうね……先ほどまでは深い眠りについていたみたいですけど』

「今は起きてんのかな」

『ええ、溇が起きたと言っていましたから』

立ち上がった俺に光太郎が不安げな表情を残して何か言いたそうな顔をしたけど、それを聞いている余裕なんてない。

まずはアスモデウスに話を聞かないと！

なんで溇と契約したのか、どうして俺と契約する気はなかったのか……何で溇を巻き込もうとするんだよっ！

セーレの部屋の扉を開けた先にはベッドに横になっているアスモデウスの姿をすぐに見つけた。

アスモデウスは一瞬こっちに視線を送り、またすぐに仰向けになって天井を見上げた。

そんなアスモデウスに俺は何も喋らずに近づく。

「なあ、あんた溇と契約したんだろ。なんでだよ、あんたはてつきり俺と契約するとばかり……」

「ごめん、君に報告すべきだったんだろうけど……」

「そんなのどうでもいい！どう言うつもりなんだよお前！？」

「元々俺の目的は彼女を守る事だ。彼女と契約するのが一番効率が

いいと思ったから彼女と契約したまでだ。彼女から文句を言われるならともかく、君から文句を言われる筋合いはない」

「あるに決まってるだろ！ 澁は俺にとっても大切なんだ！ お前が澁と契約したらお前を狙って悪魔が澁を狙ってくる可能性だってあるんだ！」

「……俺がいてもいなくても彼女は狙われる。それなら側にいて守る方が安全だ」

アスモデウスが起き上がって俺を睨みつける。

少しビビってしまう自分が情けないが、でもここで屈したら負けだ。俺も睨み返せば一触即発の雰囲気。

でもアスモデウスはすぐに視線を逸らした。

「君は何なんだ？」

アスモデウスの急な問いかけに今度は俺が首をかしげる番だった。何を言いたいのか未だによく分からない俺にアスモデウスは言葉を続ける。

「ヴアルと契約をしている時点で彼女は既に巻き込まれてる。彼女を本気で巻き込みたくないのなら今すぐヴアルと契約を放棄させ、君自身も彼女と関わらない事だ」

「な、なんで俺があんたからそんな事言われなきゃいけないんだよ！」

「それは俺の台詞だ。俺がどうやって彼女を守ろうかなんて君には関係ない。少なくとも彼女は君と俺のネックだ。君の動きを封じたがために彼女を狙う悪魔だって出て来る」

「そんな事、言われても……」

「君は何もできない。君自身の今の力じゃ他の悪魔から彼女を守れない。君の言っている事は全て綺麗事で実際の対応策なんて持って

ない」

そう突っ込まれてしまえばどうしようもない。言葉に詰まってしま
う。

でもじゃあどうすれば澁を巻き込まないで済むって言うんだ！中谷
を失って光太郎も1度サブナックによって殺された。

今度は澁までいなくなれたら……

言い返せない俺にアスモデウスの表情はどんどん冷えた物になって
いく。

「君にも君の言い分があるだろうけど、俺にだって俺の言い分があ
る。彼女を守るためならどんな事だってできる」

「……」

「俺は彼女に未来を与えたいんだ。誰にも文句は言わせない」

凜とした強い言葉に何も言い返せない。

ただ痛いほどの沈黙が俺とアスモデウスを包んでいく事だけは分か
った。

光太郎 side

「早速じゃあ悪魔探しを？」

「ああ、悪魔を探して地獄に返すしか実際に審判を防ぐ方法は無い。
地獄世界の中心人物であるアスモデウスがいる。今地獄がどうい
う状況なのかの情報も手に入るしな」

パイモンは再びパソコンで色々探している。

またやる事自体は振り出しに戻ってる感じだけど、でも確実に72
柱の悪魔たちは地獄に戻していつてるんだよな。

中谷を探しながら悪魔を返していったら大丈夫なはずだ。

でもパイモンは相変わらず固い表情。

「光太郎、今言うのは酷かもしれないが……これから先は今までの生ぬるい物ではなくなると思うぞ」

「え？」

生ぬるいつてなに？

今までのが生ぬるいとかおかしいだろ。今までも大変で死にそうになった事だって……いや、俺は実際1回既に死んでるんだ。

それよりも更にきつい事が待ってるって言うのか？

「……人数的には72柱の半分以上を俺達は地獄に戻した。だが……これから返す悪魔たちは正直言って話で解決できるような温厚な奴は少ない。それにアスモデウスが濇に協力する事態になった事から72柱の六大公も身を乗り出すだろう、今までのむしる前哨戦になるはずだ」

「六大公？」

「72柱の中でも最強と揶揄される悪魔たち……その中にアスモデウスも含まれるが、剣王バアル、死神ガアプ、恐怖公アスタロト、破壊神アモン、そして愚者ベリアル……恐らくアスモデウスを直接殺す命令を受けるはずだ。アスモデウスと1対1でやりあえるのは奴らだけだからな」

「でもアスモデウスは松本さんと契約したんだろ？頻繁に悪魔退治には連れていけないはずだ」

「そうだな、だがそんな事情は関係ない。アスモデウスの力があれば心強い。主には悪いが、これからは濇も半分強制的で連れ出す回数も増えるだろう」

今までののが本番だなんて言わない。

今までだって大変だったんだ。でもこれからが本当の本番なんだ。

72柱の悪魔の中でも最強の奴らが俺達を襲ってくる。今まで以上

に血生臭くなるんだ。

想像すらできないくらいに恐怖が襲い、俺は無意識に唇をかんだ。

きつと俺には何もすることができない。でもそれでも何かしたいんだ。

第2話 優しい貴方は

『君はサラの子孫だからね』

『貴方だったのね、あの子が必死に守ろうとした子は……』

バティンとグレモリーさんの言葉が頭の中で半濁される。

昨日、拓也と一緒にマンションに来た悪魔……アスモデウス。人間に化けた姿はあたしと同じ年くらいの少年の姿だった。

そしてあたしの彼に対する第一印象は恐ろしい、そして悲しそうな顔をしているイメージだった。

2 優しい貴方は

英語の先生が授業の説明をしている。今やってるところは過去進行形の所だ。

でも全然集中できない。まだ8月の中旬に入る今の時期は蝉の音が響き、蒸し暑い天候が続いている。“過去”その単語を聞いただけで、3日前マンションに来た悪魔の事を考えてしまう。

拓也は助けてくれたって言ってたけど、あたしにはどうしても分からない。

まずあたしは本当にサラって人の子孫なのか、呪われた子供、彼の契約石……そしてあたしのせいでひいひいおじいさんは死んでしまった。何が何だか分からなくて手で顔を覆い、視界をシャットダウンして考えても分からない。

怖い、これから自分に何が起こるのか。それが耐えられない。

去年の夏にストラス達に出会って、1年が経った。もうあたしは高

校2年になって4カ月が経とうとしてる。

その間にあった事は沢山ありすぎて良く分からないことばかりで、でも今はそれ以上に混乱してる。またバティンが襲ってきたらどうしよう。あの人はあたしを逃がさないって言ってた。

あたしは今も狙われてるんだろつか。怖い、それが恐ろしい。

誰か安心させてほしい、大丈夫だよって。絶対に大丈夫って根拠が欲しい。

「澪ちゃん大丈夫?」

隣の席の友達があたしを心配そうに見ている。

でも顔を上げたあたしに友達は不安そうな顔をした。

「顔色悪いよ。保健室に行った方がいいんじゃない?」

「……そう、かな」

友達は何度も頷いて、先生に言おうか?って言うてくれるけど、それは止めてもらった。

駄目だ、集中できない。もう嫌だ。

今日は学校はもう早退しよう。マンションに行きたい、あそこに行ったらきつと安心できる。ヴァルちゃんと一緒にいてくれたら、きつと安心できるはずだから。

そう思えば思うほど授業が早く終わってほしくて、あたしはただただ時計に視線を向けていた。

授業が終わったあたしは学校を早退した。

友達が先生に言うてくれた事に感謝して教室を出る。

グラウンドから校舎に視線を向ければ、窓際の席の上野君達のはしゃいでいるのが見えた。

拓也もあの中に混じって談笑してるのかな?でも良かった。拓也が

無事でいてくれて。

あたしは胸をなでおろして鞆を握り直した。

「漣、どうしたの？不安なの？」

マンションを訪ねてきたあたしをヴァルちゃんは心配そうにしている。嘘をつく事なく頷けば、更に心配そうな顔をされたけど仕方がない。だって怖いんだもん。マンションにいたパイモンさんとセーレさん、ストラスも眉を下げて心配そうにしている。

でもお願い、皆は普通どおりにして。じゃないともっと不安になっってしまうから。

セーレさんの部屋に彼は今いるらしい。寝ていると言う話を聞いて少しだけ安心した。そしてそれと同時に無償に彼の姿を確認したくなかった。

「ねえヴァルちゃん、今なら行っても起きないと思う？気づかれな
いと思う？」

「……行きたいの？」

「うん」

「多分起きない、随分深く眠ってるから。ついて行くの？」

「大丈夫」

ヴァルちゃんの腕をそつと離してソファから立ち上がる。

それをパイモンさんが視線だけ動かしてこっちを見てきたけど、何も言わずにそのまますぐに視線を伏せた。

ドアを開けてセーレさんの部屋に入れてもらった先には彼がベッドで寝ていた。死んだようにぐっすり眠っている。寝息すら分からないくらい静かに。そんな彼の側に近づいて膝をつき、顔を覗き込む。こうやって見ると悪魔なんて思えないや。普通の男子に見える……

「ねえ、グレモリーさんが言ってた子って貴方なの？」

返事はない、当然だ。

でもあたしは小さい声だけど、しつこく話しかけた。

「いつになつたら目を覚ますの？貴方があたしを守ってくれるの？」

怖くなって零れそうになつた雫を拭って、小さな声で泣いた。

怖い、これからが怖い。拓也はいつもこんな怖い思いをしてたんだ。狙われてるって感じた途端、恐怖が全身に襲いかかって来た。

またあの時みたいに急に現れたらどうしよう。今度はあたしが地獄に連れて行かれちゃう。

「…………ごめん」

自分の声以外の声が聞こえて顔を上げると、目を覚ました彼がこっちを見ていた。

目があった瞬間、恐怖が襲いかかり、立ち上がったあたしの腕を彼が掴んだ。

その事態に固まってしまったあたしを彼は悲しそうな顔で見ている。

「逃げないでくれないかな。君に逃げられると傷つく」

「…………起きて、たの？」

「音には敏感なんだ」

相変わらず困った顔しかしない。昨日今日あったばかりだけど、彼はこんな悲しそうな表情しかしない。握られた手はかすかに震えており、彼も何かに怯えていると判断した途端、彼から恐怖と言う物は感じられなくなった。

貴方も怖いんだね。何かを怖がってる。

再び側に膝をついたあたしに、彼はまた困ったように笑った。

「セーレから聞いた。バティンが君を狙ってきたって」

「……怖かった」

「ごめん、全部俺のせいなんだよ」

「そんなので許せる訳がない。怖かった！」

再び涙が溢れ、あの時の恐怖が思い出される。

全てに絶望した気分になった。サラなんて誰か分からない、そんな会った事も見た事も聞いた事もないくらい遠い遠い先祖のせいで悪魔に狙われるなんて理不尽だって思った。

どうして自分なのかって思った。

涙を必死で拭っているあたしの腕を再び彼が抑えた。

「擦ったら腫れる」

「貴方のせいじゃない」

そう冷たく返せば悲しそうな顔をされる。

ごめん、理不尽なのは分かっている。あたしを助けようとしてくれたんだよね、傷だらけになっても拓也を守ってくれたんだよね。

そんな命の恩人に酷い言葉を投げかけるあたしは世間一般で見ても最低なんだと思う。

でもそれ以上に怖いから。この人さえ現れなかったら、狙われなかったんじゃないか、そう思ってしまうから。涙を流すあたしの首に何かがかけてられて、視線を向けると、胸元に綺麗な小さい宝石がついたペンダントがかけてられていた。

「お守り。俺より君が持っていた方がいいと思う」

「これ……」

「サラが前にくれた、大切な物だからって契約石と交換で。契約石

が帰って来たんだ。ペンダントも返す必要がある」

アスモデウスは少し遅い動作ながらもベッドから起き上がった。そのまま歩きだそうとしたのを今度はあたしが止めた。

「どこ行くの？」

「出ていくんだ。大丈夫、君を連れていこうとした奴を全て消し去ってくる」

「なん、で……」

そんな傷だらけの体で、なんで、どうして。

冷たい事を言ったあたしの為に何でそこまでするの？サラがそんなに大事だから？サラなんて何代前の先祖かも分からないのに。

そんな子孫の為になんでそこまで出来るの？

「不思議そうな顔してる」

「だって……おかしい。何でそこまで必死になるのか」

「……彼女を守ると決めた、その子孫も全て。彼女の幸せの為にどんな事だってできる」

「サラはそんな守られる様な人じゃない」

「え？」

目を丸くしている彼に捲し立てるようにあたしは言葉をつづけた。もう涙なんて気にしてる余裕はなかった。

「サラなんて大嫌い、あんな人いなかったら幸せになれた！あの人が貴方の契約石に変な呪いをかけたから父さんの家族はずっと兄弟が出来なかった！ひいひいおじいさんが死んだ！全部あの人のおかげなのに、なんであんな人の為に……！あんな人、守られる価値なんか無い！」

「それ以上は言わないで」

口を手で塞がれて言葉を遮られた。

辛そうな、泣きそうな表情をしている彼が視界に入ったら、もう自らそれ以上悪態をつく気にはなれなかった。

彼は何度もごめんと謝り続ける。なぜ貴方が謝るの？

「ごめん、全部俺のせいだ。俺が彼女に甘えてたから……彼女と共に居るといふ、叶いもしない願いを願ったから。そのせいで彼女は憎しみに走り、君まで巻き込んだ」

そのまま涙を流して彼は泣き続ける。

2人して涙を流して、止める事もしないまま時間だけが経過した。次第に涙も引つ込み、茫然とただ今の状況を確認する作業をし始めたあたしの手を彼が握った。強く手を握られ、顔を上げたら真剣そうな表情の彼がいた。

「サラの子孫だからって理由は嫌かもしれない。でも君を守りたいんだ、地獄に連れて行かせなんかしない。君が望む世界を作ってあげたい」

「どういふ、事？」

「君に未来を与えたい。幸せな未来を……審判は必ず止めて見せる。サラの呪縛は君で終わりにさせる」

だから泣かないで。

そう言っただけ悲しそうにしながら、安心させるために向けられた笑顔は温かくて、そして酷く胸を締め付けた。

グレモリーさんの言っただ通りだ。彼は全てを捧げてくれる。それが罪悪感から来る物なのか、サラって人への愛情から来る物なのかは分からない。でも彼は絶対に守ってくれるんだ。

首に掛けられたペンダントを再び彼の首にかけた。

「大事な物なんですよ？貴方が持ってなくちゃ」

「でも……」

「だから貴方の契約石をあたしにちょうだい」

彼は驚いてあたしを見ている。この展開は予想外だったんだろう。でも守ってくれるのなら側にいて、じゃないと不安になる。影から守るんじゃないかと側にいて守って。

彼は渡すのを躊躇していたようだけど、怯えた表情で自分でいいのか？と聞いて来る。

そんな事決まってるじゃない、じゃなきゃこんな事言わない。

頷いたのを確認した彼の手が動く。そして手に契約石が渡された。見慣れてしまったボロボロの指輪は彼の手に触れた瞬間に新品のように輝いた。

「守るから、絶対」

「……うん」

契約石を受け取ってそれを指にはめた。少し大きいかな、人差指に丁度いい。

「ねえ、貴方の事なんて呼べばいい？そのままアスモデウスでいいの？」

「それかアスモでもいい。そう呼んでくれる奴がいた」

「そうなんだ」

「でも、もし君さえ良かったら……その、時々でいいからダリルって呼んでほしい」

「ダリル？」

僅かに頬を赤く染めて頷いたアスモデウスがなんだか可愛らしくて少し笑ってしまった。
でも笑ったのが気に食わなかったのか、恥ずかしそうにしながらも不機嫌そうな顔をした。それをフォローするかのよう慌てて会話をつなげる。

「じゃあダリルって呼ぶね」

「違うっ……と、時々でいいんだ。ストラス達に聞かれるの……恥ずかしくて。ストラス達が名前の意味を知ったら、絶対にかからなくなる」

「名前の意味？」

「な、なんでもないんだ！」

「じゃあ2人の時に呼べばいい？」

初めて彼が笑った。

気恥しそうに頬を染めて。

「じゃあ君の事、なんて呼べばいい？」

「澪でいいよ」

「澪……分かった」

何度も名前を繰り返して呼ばれて少し恥ずかしかったけど、それ以上何かガストンと心の中に落ちていって、先ほどまでの怖さは無くなっていた。

きっと彼が助けてくれる。根拠も無くそう思った

「アスモ……いや、ダリル」

「え？」

「……よろしく」

「あっ！う、うん！」

第3話 無気力

気に入らない事なんてない、でも何かに熱中してるわけでもない。現状に不満なんてない、でもその生活に満足してるわけじゃない。生きている事がつまらない訳でもない、でも何かをしようとも思わない。

強いて言うならば無気力。それが今の状態。

でもそれでも良かった。このまま何も考えず流されるままに生きていく。

それでも良かったんだ。

3 無気力

アスモデウスが澁と契約したと言う話を聞いてから1週間が経った。学校は久しぶりすぎて精神的に授業はきつかったけど、でも皆と話すのは楽しかった。この中に中谷もいたはずなのに……いや、連れ戻すんだ絶対に。

皆は行方不明になってしまった中谷の話題を避けてる。意図的なのか、もう無意識なのかもわからない。でも皆にとっては辛い話だから当然だ。自然と口にする事の無くなった中谷の名前、それを口に出す勇気が皆にはまだ無い。

中谷はソロモン72柱の悪魔、フォカロールによって殺された。でも皆から中谷は恐らく完全に死んではいないって言ってた。中谷の魂は人間の中でも優秀な部類に入るらしい、その事から最後の審判で戦う天使の兵として天界に招待された可能性が高いと言われた。つ

まり中谷は天使として天界にいるんだって。

中谷はきつと生きてる、契約者が死んでしまったらヴォラクだってエネルギー不足で満足に動く事もできなくなる。でもそのヴォラクにエネルギーが届いてるのが何よりの証拠。そう思いこまなきゃ叫んで泣き出しそうだから。

一体俺はどれだけの人を巻き込めば気が済むんだろう。皆に迷惑かけて、契約者に悲しい思いをさせて、結局救えた人なんて僅かだ。目の前で沢山の人が死んでいった。悪魔に殺されていく。

無意識に首にかかっているロザリオを握りしめ、俺は振られた話題に何とか笑って返事をする事にした。

「村が全焼？これ中国？」

学校が終わって光太郎と漣とマンションに立ちよれば、パイモン達全員でパソコンを覗き込んでいた。

アスモデウスは少し離れた所で待機している。声をかける前に漣がアスモデウスの所に近づいて行けば、アスモデウスは少しだけ嬉しそうに顔をして、そのまま2人で会話をし出した。なんか面白い。

いや別にアスモデウスが邪魔って訳じゃないけどさ、漣をアスモデウスは守るって言いながら確実に巻きこもうとしている。それが気に食わない。漣だって漣だ、頼るなら俺に頼ってくれればいいのに……まあ俺が当てにならないからだろうけどさ。

何となくアスモデウスに話しかけるのは気が引けた。俺はそのままパソコンを覗き込んでいるパイモンの近くに腰かける。光太郎も空いた場所に腰を下ろした。そして俺達にパイモンが悪魔を見つけたかもしれないと言う話を振って今に至る。

光太郎がパイモンと2人で話し、俺はその会話を聞く事に集中した。

「人口が数百人程度の山間の小さな村だ。この村で1週間前に火災が起きて村でもかなりの規模が全焼している。村人も38人の死亡が確認された。捕まった青年は21歳の中国人男性」

「でも犯人は見つかってるんだろ？不審火なら分かるけどさ」

確かに。犯人が見つかったのなら、こつちがそいつと接触するのは不可能に近い。だって多分拘留されてんでしょ？日本人で関係の無い俺たちが警察には行けないしなあ。

でもパイモンの話には続きがあった。

「そいつは裁判で無罪を勝ち取っている、だから騒ぎになっているんだ。それにこういう力を持つ悪魔がいるから注意をはらっている」「力？じゃあ分かってるのか？」

「悪魔アイム。猫と蛇、人間の首を持った悪魔で巨大な蛇に乗って現れる。その手には炎が燃える松明を持ち、その炎で全てを焼き尽くす。そして奴は法律の知識に詳しく支配する。奴の息がかかった弁護団なら裁判を覆す事だって可能だ。ある意味、犯罪者にとって喉から手が出るほど欲しい能力を持っている悪魔だな」

光太郎との話を終えたパイモンはパソコンを閉じた。もう行く気満々って感じじゃん。

聞いた所、その村はここからだとき差があまりない場所らしく、すぐに行けるらしい。じゃあ早速行くなって事なのかもしれない。

「行くのか？」

「はい、サタナエル様の御復活が近付いている今、悠長に待っている場合ではない。主、行きましょう」

パイモンはそう言いながらアスモデウスにチラリと視線を送った。アスモデウスはその視線に気づいて、気まずそうに俯いたけど、パ

イモンは目を逸らさない。そしてその視線の矛先は澪にも向かった。恐らくパイモンは澪を連れていきたいんだろう。澪を連れていけば必然的にアスマデウスも連れていく事になる。

澪を守るって豪語してるアスマデウスがついてこないはずがないからな。

正直澪は連れて行きたくないけど、アスマデウスは連れて行きたい。だってあいつがいれば100人力な訳だし。そう言えば……

「シトリーとヴァルは？」

「お姫様のお守り。見たい映画があるんだって、もちろん恋愛物だけど。シトリーがチケットをもらってきてさ、強制的に連れて行かれてるんだ」

「ヴァルも相変わらずだなあ。セーレは誘われなかったのか？」
「残念ながら俺はナイトに向かなかつたみたいだ」

そう言って笑ってるけど、セーレは誘われなくて安心してんだろうなあ。ヴァルは暴走したら中々止められねえからな。

いつつヴォラクがヘトヘトになってっし。ま、あいつらしくていいけどね。

「なーなー拓也」

「なんだよヴォラク？」

「拓也はさ、分かんないか？中谷の場所。ルシファー様から聞いてない？」

「聞いてたら言うに決まってるだろ。俺だって中谷探したいんだから」

「まあ……だよな」

シユンとしてるヴォラクの頭を撫でる。手は振り払われたけど悲しそうな表情はそのままだ。

俺だって中谷を早く見つけたい。だから一步一步進んでいくしかないんだ。

立ちあがってベランダに出ていくパイモンの後を追いかける。そしてアスモデウスに視線を送った。

アスモデウスはあくまでも判断は漣に任せるらしい。漣が行くつて言ったら止める事もせずについて行くんだろう。

「あたしも行きたい。行こうアスモ」

「ヴァルはいいの？君はヴァルとも契約してるんじゃない……」

「ヴァルちゃんは帰ってきてないもの。広瀬君も行くみたいだし、ヴォラク君は？」

「俺パス。あいつら鍵持ってたてないから、留守番してなきゃいけないの」

どうやらアスモデウスは来るみたいだな。

漣とアスモデウスの様子をパイモンとセーレは険しい表情で見ていた。それは俺も同じだ。

「ここって本当に中国？なんかすっぱー田舎なんだけど。オリンピックツク跡地は？」

『何を言っているのです貴方？』

ジエダイトに乗って、中国に着いて北京とかに行くんだろうとワクワクしていた俺が連れてこられた場所は北京とはかけ離れた電気も通ってないであろう小さな村だった。

家も日本の家と比べるとろくて壊れそうだ。華やかな北京とは対照的な所だった。

「え、え？」

「事故の起こった場所に向かうのがセオリーでしょう。何を期待されたかは知りませんが、ご了承ください」

うん、まあそうなんだけど…

村の人たちはよそ者の俺たちをじろじろ見ている。

「俺たち日本人ってばれたのかな…？」

「着てる服とかも違うしね。俺はあんま東洋人の顔の見分けはつかないけど、よそ者とは思われてるんじゃない？」

セーレの返答で自分達の服と村人達の服を確認する。

あ、本当だ。なんかこんなこと言ってるっていいのかわかんないけど、着てる服がちよっとくたびれてるってゆーのかな？

うん、服の色もなんか少し変色してるし、いつつも着てる服なのかな？

確かに村の中に俺たちの様な格好をしている者は1人もいなかった。

「少し貧しい村なのかな？」

「そうですね。日本ではこういう風景は余り見たことがありませんでしたな」

「パイモン？」

「いつだって被害をこうむるのは下の者です。この国の首都の人間がどれほど裕福な暮らしをしているかは知りませんが、それでもやはり国の発展が大きくなればなるほど貧富の差も大きくなる。当然ですがね」

テレビでそういうのは聞いた事がある。

でも見た事がなかったから深く考えなかったけど、なんか実際見ると複雑だな。

「少し辛気臭くなりましたね。主、事件現場に向かいますよ」
「あ、うん」

パイモンが村人の視線もお構いなしにどんだん村の中に入っていく。俺は慌ててその後を追いかけた。

「……進めませんね」

パイモンがまたかとも言うようにげんげなり呟いた。目の前には警察官の姿。

中国語で何か言いながら、これ以上は行けないと言う様なジェスチャーをしていた。

その周りには数人のカメラマンやアナウンサーの姿。俺達もテレビ局の人間って間違えられたのかな？

「どうする？このままじゃ調べられないな」

「そうだな……一度少し離れた村に行くか。情報が手に入るかもしれない」

セーレとパイモンの話し合いで、少し離れた場所に移動することにした。

少し離れた場所って言うても歩いたら時間がかかるからジエダイトで直行。こことはまた別の農村部に辿り着いた。そこでも家事の話はニュースになっていて、なんで釈放したんだと村人は怒っていた。

まあ捕まった本人自体は事件の犯人を否定してるけど、他の人間は全くそれを信用してない。だから裁判の結果が、こんなに話題になってるんだ。

パイモンやセーレが声をかければ、村人は眉を寄せながら身ぶり手ぶりで色々伝えている。なんだか語尾が荒いからすつげえ怖いな。ストラスを肩にとまらせている俺に色々な視線が突き刺さる。まあ物珍しそうな顔をして可愛らしい子どもが俺を見てるよコリヤ。溇はアスモデウスと少し離れた場所に避難してる。なんだか溇と契約を決意してから、何となくアスモデウスに関わりたくない。嫌いになったって訳じゃないけど、何となく気に食わない。でもそれは向こうも同じの様だ。

暫くしてパイモンが戻ってきて、少し移動しようと言ったから村の隅に俺達は移動した。

やっぱり村の中心部では警察が時々出入りしている。なんだか治安が良くないなあ。

「主、やはり今回の件は随分きな臭いようです。村人も犯人を無罪にした正当性が分からないと言う声が多数上がっています。そして気になるのがこの男です」

パイモンが見せてきたのは1枚の新聞。中国語で書かれてるから全く分からないけど、写真だけを見てくれればいって言われたから、俺とストラス、溇とアスモデウスは新聞を覗き込んだ。

写真には1人の青年と2〜3人の男の姿が映っていた。こいつらがどうかしたのかな？

「一番左の男、悪魔アイムが人間に化けた時の姿に似ているのです」
「ああ、確かに彼が人間に変わったらこんな感じだな」

アスモデウスまで同意するもんだから、ますますこいつが契約してるんじゃないかって思ってくる。

それにしてもこいつ何者なんだ？写真ではうつすらだが笑みを浮か

べている。マスコミがあえてこの写真を起用したのか、でも笑うつて少し不謹慎な気も……

「ストラス、これなんて書いてんの？」

「……ほー」

あ、そうか。一応村の中だ。どこで誰が聞いてるかもわからない。ストラスが下手に喋る訳にはいかないよな。見た目フクロウなんだし。

なので隣にいたセーレに聞いてみた。

「この青年は有名大学の4回生みたいだね。彼が火災を起こしたって警察に裁判をかけられるはずだったんだけど、なぜか弁護側の無罪の言い分が通ったんだ」

「そう言う事ってあり得んのか？」

「まあ、こんな短時間にあっさり疑いが解けるなんて有り得ないだろうね。だから街の人達は未だに不信感を持つてるし、パイモンも怪しんでるんだ」

話を聞く限りでは怪しい匂いがプンプンするよ。でも本人がどこに住んでるなんかも書いてないから分からない。

当てずっぽうで探すにもあまり時間はない気がする。

今回はこいつが怪しいってわかればいいのか？何だかよく分からないけど。

「パイモン、これからどうする？」

「今日は引きましょう。あまり大きな行動はすぐに起こさない方がいい。誰が見ているか分かりませんかからね」

パイモンはアスモデウスにチラリと視線を向けた後すぐに背中を向

けた。

パイモンは未だにアスモデウスを怪しんでるみたいだ。危ない奴じゃないって言うのは分かるんだけど。

アスモデウスも少し複雑そうだ。

ストラスがパイモンの肩に移動し、何かを話しこんでしまったから、俺はセーレと適当に会話し柄人がいない場所に向かった。

ストラス side

『パイモン、まだ怪しんでいるのですか？』

「……お前は信じられるのか？バティンの話を」

確かに色々と偶然が重なりすぎているとは思いますが。拓也に溇、そして中谷……これほど近い存在で、ここまで悪魔と天使に巻き込まれれば、不信感が沸いてくるのも無理は無い。しかし……

『実際契約石は溇の家にあった。彼の話は真実であった可能性が高いでしょう』

「正直前から気に食わない相手だったんだアスモデウスは。綺麗事だけで生きている姿がどうにもな……奴は自分の理想で溇を殺す気がする」

『パイモン？』

パイモンの嫌な予感当たるから、余り馬鹿にして話を逸らす事はできない。

一瞬アスモデウスの視線を送る。彼は溇と何かを話している、その姿は非常に中睦まじくて大変よろしいのですが、相手が彼ではなく、拓也や光太郎だったら。

「奴は溇にサラの面影を重ね過ぎている……今はいいだろうが、それが溇にとって重荷に感じてきた時、溇の心がどんどん崩壊してい

くかもしれない」

『……貴方は何が言いたいのです?』

「サラの呪いからは逃げられない。バティンはそう言っていた。俺は漕がサラの様にアスモデウスに魅入られて罪を犯す事になる気がしてならない」

『そ、その様な馬鹿な事がありますか。考え過ぎです』

「ああ、俺だつて考え過ぎだと思う。だがどうしても拭いきれないんだ。嫌な予感がな」

貴方が言つと、肝が冷えますよ。

第4話 殺戮ショー

「ストラスどう思う？どうやってたら本人に会えんのかな？住所とかも全く分かんないし」

『そうですなえ……』

夕飯前にストラスとダベっているとニュースで中国の火事の事件が大々的にピックアップされている。

そしてアナウンサーが読み上げた原稿はこうだった。

『無罪を言い渡された“楊^{ヤン} 昌華^{チャンホウ}”氏が昨晚記者会見を行いました』
「これだ」

4 殺戮ショー

テレビに映ってるのは昨日俺達が調べに行った中国で噂になっていた青年だ。中国では有名な大学に在学してるらしく、家も金持ちの様だ。確かにそんなエリートが火災事件を起こすとか、端から考えたら信じられないけどな。テレビには記者会見の様子が映っている。弁護人に囲まれて本人が中国語で何かを話している。

「安全地承？起？事？？。（検察が真実を認めてくださり安心してます）我的？分下降了？告据？道，但它不会回来了。（しかし無実の罪で報道された事により落ちた僕の評価は取り戻すことはできないでしょう）」

日本語に訳された文が画面の下の方に出てきてそれを読みながら、

涙ながらに語る楊さんを見てると可哀そうになってくる。本当はこの人は違うんじゃないかな？パイモンも間違ってるだけの様な気もするけど……

でもストラスは眉を顰め、不快そうな表情でテレビを眺めていた。なんだよ、お前まだ疑ってるのか？可哀そうじゃねえか。

「不細工な顔になってんぞ」

『失敬な……貴方には言われたくない。やはり拓也、契約者はこの男でしょう。間違いありません』

なんで断定できるんだよ。ってか今、俺のこと遠まわしに不細工って言っただろ！？そう突っ込めばストラスは不細工発言は華麗にスルーしてテレビを見ると催促してくる。調子のいい奴め……

映ってるのは楊さんの弁護士が事情を説明している所だった。短髪でガタイのいい若い青年だ。歳も見た所20代後半くらいだろう、こんな若い奴で務まるのか？いや別に悪いってわけじゃないんだけど、日本ではこういうインタビュー受けてる弁護士って年取った経験豊富そうな人ばっかだからさ。

『この青年は悪魔アィムが人間に化けた時の姿に間違いありません』
「……マジで？」

『ええ、このように顔がばれる行為をして私達を誘っているのですようか』

でも確かにそうだよな、アスモデウスがいるんだ。向こうだって下手な事はしてこないはずなのに、こんな中国全土だけじゃなく、日本にまで顔が割れる事をして俺達が来るのを狙ってるのか？

また過去にスイス人と契約していた悪魔ザガンみたいに俺達から仕掛ける為の挑発してるのか？どっちかは分からないけど、とりあえずパイモンに連絡した方がよさそうだ。

ポッケからケータイを出し、新しくしたせいで、まだ慣れない手付きでキーを押す。

『はい』

「あ、パイモン？拓也だけど……今テレビで昨日調べた中国の事件が映ってんだけどさ、4ちゃんで」

『それならばもう見ました。昨晚youtubeにアップされてましたからね』

「は、早いな」

『まあひがな1日パソコンで調べてばかりいれば、情報など早く手に入りますよ』

それもそうか。じゃあやっぱパイモンも知ってたんだな、ストラスがこう言ってるんだ。パイモンも怪しいって思ってるに違いない。案の定、パイモンはストラスと同じ事を思ったらしい。あの男は悪魔アムが人間に化けた時の姿で、俺達を挑発しているのかもしれない。

その時、テレビに映っていた弁護人が苦笑いしながら記者に向かって言葉を放った。

「我有我的正？斗争。（私は私の正義の為に戦っている。）？不明白、但永？不会知道。（しかし分からぬ者には絶対に分からないでしょう。）正是在？？照片棚、我可能属于受害者、我将准？？？掉。（この映像が流された事で、私に火の粉が降りかかるかもしれないませんが、私はその者たちを正義の炎で焼き尽くす覚悟で臨みたいと思います）」

『あからさまな私達に対する挑発ですね』

ストラスがため息をついて画面を眺めている。俺もボーっとそれを見てたから、パイモンに声をかけられて慌ててケータイに耳を傾け

た。パイモンが言うには今は楊さんの警護が厳しいみたいだから、しばらく様子を見た方がいいって言ってる。まあたしかにそれもそうだ。

それに返事をしてケータイを切った。ニュースはもう国内の物に切り替わっていた。

そしてそれから1週間後、事件が起こった。

また農村部で大規模火災が起こったのだ。死者は30人よりも上回り、村は壊滅状態。救済待ちだというニュースが流れた。この短期間で似たような事件がまた発生した事で、中国警察も犯人は同一人物だと見てるみたいだ。

「ストラス……」

『可能性は高し、ですか。やれやれ、全く派手にやってくれますねえ』

「やれやれじゃねえだろ。こんだけ被害出てるのにどうすんだよ」

会話をしながらとりあえずマンションに向かった。マンションでは事態を既に知っていたパイモン達が深刻な顔で話をしていた。

このまま行けば被害は広がる一方かもしれない。一刻も早く悪魔を倒して地獄に戻さなきゃいけないよな。

「主、今日ケリをつけましょう。この男を野放しにしておくのは危険です」

「分かった。じゃあ早速行くのか？」

「……そうですね」

パイモンはアスモデウスに視線を寄こしたが、すぐに逸らした。どうやら今回アスモデウスを連れて行く気はなさそうだ。まあ濡もいないし仕方ないよな。光太郎もない状態だからシトリーも向かえない。

悪魔は契約した人間と一定距離を離れると行動が出来なくなる。悪魔と契約するには契約石って言う悪魔が1匹1個持っている宝石を譲り受けたら契約成立だ。後は契約内容や等価交換の内容が決められる。

その契約石って言うのは悪魔の心臓で、悪魔が人間の力を借りて現世に留まるのに必要な行動力のエネルギーを契約者から採取する役割を持っている。そのエネルギーで悪魔は行動が出来るようになる。でも今回みたいに外国に向かうときに契約者がいない場合はエネルギーが届かなくなってしまう。届く範囲は大体本州程度の距離のようだ。

その事から結局俺とパイモンとセーレ、ヴォラクで向かう事にした。ヴアルは見送る為にベランダに出て手を振る。それに振り返って俺達は中国に向かった。

「行っちゃった……」

中国では騒ぎの的になっており、捨てられた新聞の見出しに火災の事が載っていた。

「パイモン、どうするんだ？どうやってそいつに会うつもりなんだ？」

「こいつは大学生だとテレビで言っていました。大学に向かえば会えるかもしれません」

流石に無罪と言い渡された後で報道陣も騒ぐ気がないのか、大学は整然としていて大きな騒ぎが起きている様子は無い。生徒達がちらほらと歩いているけど、多くは無い。これなら普通に中を歩いても平気そうだ。

大学の門をくぐり、楊さんの居場所を聞く為に、セーレ達が適当に

歩いている男を捕まえて中国語でそいつがどこにいるか聞けば、最初は学部が違ったり、楊さんでも別人だったり、当てにならない情報だったけど、聞いて行くうちに段々信憑性の高い物になっていく。

「？、他会那？就不得不会？室。我从？个人、但他也可能会被退回。（ああ、あいつならさつきゼミ室にいたぜ。でも皆帰ったからなあ、もしかしたらそいつも帰ったかもしれない）」

「??。（有難う）」

セーレが頭を下げてこっちに向かってくる。どうやら何か分かったみたいだな。

「あいつなんて？」

「ゼミ室にいたつてさ。場所も教えてくれたけど、でも俺達が中まで入れるのかな？」

「大丈夫だろ。日本の大学だって中入れんだしさ」

まあゼミ室まで行っていいか分からないけど、セキュリティだって厳しくないんだ。入るくらいはできそうだ。

俺達はセーレが教えてもらった場所に向かって歩き出した。流石にヴオラクとストラスががいるせいで周りの目が少しだけ痛かったけど、どうせもう二度と会わない奴らだしな……うん、なんて思われてもいいや。そう思わなきゃ、この視線に萎縮しちやいそう。

大学の中は授業が終わったのか授業中の時間なのか分からないけど、中を歩いている生徒は少ない。少しだけ安心した。

向かった先のゼミ室は電気がついていて。もしかしてあいつがいるのかもしれない。息を飲んだけど、ハッキリ言って恥ずかしくてドアを開けたくない。もしお目当ての奴がいなくて知らない奴だけだったら、なんて言っただけ扉を閉めようか。

グルグル頭の中を回しているとかすかだが声が聞こえた。あんまり

壁は厚くないのかもしれないなあ。

「？是？得我从来没有？。（まさか見られてたとか思わなかったぜ。）？呀．．．我沮？的想到他？活着。（ちくしょう……あいつが生きてると考えただけで苛立つ）」

「他会？了什？？（殺しちまうか？）我？得很好、？在、我将再次？？做些什？。（いいんじゃないの、また俺が何とかしてやるしさあ）」

「哦、我就可以了、如果？准？？始找工作……（お前がいれば大丈夫だろうけどな……）我也有、当？想成？一个分心了。会感？非常好、？？想（俺も就活の準備始めなきゃいけないからな、また憂さ晴らしにしたい時にするさ。こんなに気持ちがいいと思わなかったぜ）」

「如果？的愿望是在？代的？助。（お前が望むならいくらでもしてやるさ）我希望？在？里是？魂在一起。（魂が集まってこつちも願つたりだ）」

ストラス達の表情が変わる。パイモンがいきなりドアの取っ手に手をかけて、行き追う良くドアを開けた。

ビックリしてるのは俺も同じで、相手もかなり驚いた顔で俺達を見ていた。でも悪魔とストラス達が指摘した男の方は、目の色を変えて睨んでくる。

「有人？？（誰だ？）」

「什？是？？理的？魔。（やはりお前が悪魔と契約していたんだな）」

パイモンが中国語で何かを告げれば、青年の楊さんは面白可笑しそくに笑った。なんだ？なんで笑ってられる？

真実だったならば青ざめてもいいはずだ、嘘だったとしても見知ら

ぬ人間にいきなりこんな事を言われて取り乱すはずだ。なんでそんなに落ち付いていられる……

「是？是？？什？？？是在？个世界上没有魔鬼。（あんた何言ってるんだ？悪魔なんか信じてんのかよ）」

「不撒？。撒旦被？？是下一个家？。（嘘をつくな。隣の男は間違いなく悪魔だ）」

ヴォラクに小声で訳してもらい、目の前の楊さんに改めて視線を送る。楊さんは笑ったままの表情を崩さない。

でも今までよりもずっと低い声でパイモンに問いかけた。

「？是？？（てめえ誰だよ）」

「我？隔壁の家？。（隣の男に聞けばいいだろう）」

楊さんは隣の男に何かを聞いている。間違いない、ニュースに出てた弁護士だ。でもなんで弁護士が大学の、しかもゼミ室に入り込んでるんだ。

普通そこまでしないだろう。だから怪しいんだけど……

楊さんはそいつに何かを聞いた後、少し驚いた顔をしたけど面白そうに再び笑いだした。だから何がそんなに可笑しいんだよ！

「哦、？了、或者？的戒指的？承者。我不喜？日本人。（ああそっか、お前が指輪の継承者って訳か。よりによって日本人かよ）」

何か今俺を見て馬鹿にするような事言わなかった？中国語は分からないけど、なんだか気分が悪いぞ。

その時、扉が不意に閉められて俺達は閉じ込められてしまった。やっぱりこいつが悪魔と契約してたんだ！

となると、横の男がストラス達が言っていた悪魔アムって奴だよ

な……

「我??已?找到了?害。我想回家。（見つかったからには殺しちまおうぜ、行こうアイム）」

「想要??。（望みのままに）」

アイムが悪魔の姿に変わる、その姿はストラス達が言った通り、首元からは猫が繋がっており、左手の腕から先は蛇が生えていた。残った片方の手に炎が燃え盛る松明を持っている、本当に化け物の様な姿だ。

『待つてたんだよ、お前をな』

アイムが松明を俺に向けて来る。なんだか怖くて慌ててセーレの後ろに隠れてアイムの言葉に目を丸くした。

待つてた?まさかまた俺を地獄に送るつもりなんだろうか?そんなの嫌だ、絶対に!あんな所に連れて行かれたら今度こそ殺される!いつの間にかセーレの服の袖を握りしめた俺を見かねて、ヴォラクが首をかしげた。

「まさかまた拓也を地獄に連れていこうって魂胆じゃないだろうね」

『はあ?そんな奴もういらねえよ。ただ俺達は天使達の目的を阻止する為に、てめえを探してんだよ』

「目的……?」

『てめえが奴らに用済みになる前に殺す必要があんだよ、サタナエル様の為にな。馬鹿な野郎だ……ルシファー様からの寵愛を拒むとはな。てめえが生き残れる唯一の道だったのによ』

魔王ルシファー、地獄の王って言われていた悪魔。あいつには地獄に連れて行かれた時に会ったことがある。でもあいつが俺を寵愛し

ようとしてただなんて初耳だな、あいつには拷問まがいな今年かされてないっつーのによ。

サタナエルの為……やっぱあいつが裏で手を引いてたのか？いや、それ以前にサタナエルはどうなった？最強の悪魔と言われている奴見た目は小さな子供だったけど、天使達によって水晶の中に封印されていた。まさか俺のせいで目を醒ましたりはしてないよな。

それを聞いたかったけど、現実残酷だ。

先にヴォラクが問いかけて、アームは笑って返事をした。

『ああ、サタナエル様はお目覚めになった。後は自らの御力で水晶を破壊し、復活を遂げる。継承者、てめえは良くやったぜ。本当にな』

俺のせいで、あいつが目を覚ましてしまったんだ……じゃああいつのペットだった黙示録の獣オーメンも目を覚ましたはず。首が7つもあって角が11本もある巨大なドラゴン……終わりだ、審判が近づいて来る。俺のせいで皆が死んでしまう。天使と悪魔が次の世界創造をかけて戦う戦争、そして人類の滅亡は確実に迫ってる。

震えが止まらない俺をストラスが羽を使って頭を撫でるけど、そんなに落ちつく訳がない。地獄に連れて行かれた時、どうすれば良かった？従っていればよかったのか？いや、逃げなきゃいけなかった、逃げなきゃ俺があとで殺されていた。

でも俺が逃げる為に使った力のせいでサタナエルは目覚めてしまったんだ。地獄最強の悪魔が……

そしてアームは俺を挑発する為にテレビにまで顔を出したんだ。自分を倒しに来た俺達を返り討ちにする気だったらしい。

でもアームは何かを見つけられないのか、少しだけ頂垂れた。

『あーあ、アスモデウスの奴いねえじゃん。あいつは俺が殺したかったのによお、まあ都合か……あいつは六大公に任ずとするか』

燃え栄える松明の火は消える事は無い。

アムの後ろではこの状況を理解してるのか、してないのかは分からないけど楊さんがニヤニヤ笑って俺達を眺めていた。

こんな凶悪な事をして、悪魔と契約までして何がしたいんだこいつはっ！

「做出最好的表演。？我招待我。（最高のショーに仕立てる。俺を
楽しませてくれよ）」

『委托我？的主。（任せろ我が主）』

第5話 燃える炎と共に

「我是丑当然、大学做我的燃？。（アィム、流石に大学を燃やしつくすのは不味い）？我？去？空？。（空間移動頼むぜ）」

「是？。（そうだな）我并不想成？一个主要缺点。当然可以。（主に不利になる事はしたくない。いいだろう）」

アィムが真つ暗な空間を広げる。こいつもそうだけど大体の悪魔は契約者の言う事を聞いて、他人に自分たちの姿が目撃されないように、外から中を覗けない結界や空間と呼ばれる異次元への扉を開くことが多い。

ブラックホールのような空間は他の悪魔たちが使う“狭い場所では戦えないから別の場所で戦おう”って奴だ。この中に入れて事なんだろうな。

でも気をつけなきゃいけないのは、この先はアィムが作り出した空間。奴専用の戦場なんだ。

5 燃える炎と共に

何も言わずに入っっていつてしまったアィムと楊さんを追いかけるかのようにパイモンとヴォラクが一斉に空間の中に飛び込む。残された俺とストラスとセーレの間に嫌な空気が漂う。

「拓也……」

「俺のせいでサタナエルが……」

「大丈夫、まだ間に合うよ。その為にも今はしんどいだろうけど頑張ろう」

セーレがそう言って優しく笑う。まだ間に合う、その言葉に少しだけ心が軽くなった。俺とセーレ、ストラスも空間の中に飛び込む。その先には燃え盛る炎で囲まれた空間が広がっていた。

今までの悪魔、パイモンも含めてだけど、相手の空間は何もない世界みたいなのがほとんどだったけど、こいつの空間は少し違うみたいだ。フルフルも結界を張る際、雷のドームを作り出したし、悪魔によって結界や空間の種類は様々なようだ。

燃え盛る炎の中、楊さんを庇うかのように巨大な蛇に跨り、アイムは松明を持つ。

『さあ行くか、骨まで燃えつくされて灰になるがいい!』

アイムがそう言い松明に息を吹きかける。それだけで何倍にも膨れ上がった炎がこっちに向かって一直線に向かってきた。

「うあっ!」

『拓也下がれ!』

ヴォラクに言われた通り後ろに下がって避難すると、ヴォラクが2つの首を持った巨大なドラゴンのフォモスとデイモスを召喚し、2匹の口から炎が飛び出す。

アイムの炎と相殺されて凄まじい熱気と煙が襲いかかって一気に汗をかいた。煙のせいで前は全く見えない。

でもその隙にアイムを上に乗せていた巨大な蛇がフォモスとデイモスの足に巻き付いた。

『フォモス、デイモス!』

『心配ない主! 私達からお離れください!』

巨大なドラゴンが牙と歯をたて、それに応戦する大蛇。ハリウッド映画の様な激しい取っ組み合いが目の前で繰り広げられて茫然とする。ヴォラクがフォモスとデイモスから離れ、状況を不安そうに見守る。アイムも大蛇から身を放し、その光景を満足そうに眺めていた。

でも厄介な大蛇を引き離れたのは大きい。この隙を逃がさないかの様に、ヴォラクとパイモンがアイムに剣を向ける。

『大蛇がいなくなったお前に何ができるんだ？悪い事は言わない、降伏しろ』

『誰がするか。てめえら裏切り者に屈服するくらいなら死を選ばず』

アイムが松明の炎を吹きかけてパイモン達を威嚇する。フォモスとデイモスがいない今、こいつの炎に対抗できるのはソロモンの指輪の力を用いて水の魔法を使える俺だけだ。

出てくれ……そう指輪に念じれば宝石がちりばめられた大きな剣が目の前に現れる。重そうな見た目の割にはすごく軽くて扱いやすい。セーレから離れ、剣を持ってアイムに近づいて行く。そんな俺をアイムは少し苛立った顔で見つめた。

『サタナエル様の御子息か。だが用済みのてめえに用はねえ……大人しくしとけ！』

アイムが俺に向かって松明の炎を吹きかける。炎は真っ直ぐこっちに向かってくる。

大丈夫、悪魔の王サタネルの称号を持つ悪魔達と戦ってきたんだ。今更こんな奴を恐れてはどしようもない。水のイメージを剣に送り続けられ、薄く光り出した剣を向かってくる炎に向ける。

「行けっ！」

剣から出された水はアイムの炎とぶつかり合い、大量の水蒸気を発生させる。その隙を逃さずパイモンとヴォラクが攻撃を仕掛けると、アイムは咄嗟に自分の足元に炎をまき散らし、近づけない様にガードした。

距離をとって一息ついたアイムは冷やかな視線をこっちに向けてきた。

『なんだよ、まだ天使の力借りて魔法とか使えんの？意外だな……てつきりソロモンの指輪の力はもう使えねえって思ってたんだけどな』

『何が言いたいんだよ』

『サタナエル様の力に浸食されて悪魔になっていつてるお前に天使の力が使える訳ねえだろ。俺達悪魔と天使はエネルギーが全く違うんだからよお。次第に指輪の力は使えなくなるだろうよ。その時、てめえが用いる事が出来るのはサタナエル様の炎のみだ』

『違う……』

『違わねえ。ハッキリ言うぜ、てめえは悪魔だ。天使に利用されて人間から悪魔にされちまった可哀想な被害者だ。恨むなら、てめえに指輪を渡したミカエルと利用しようと考えたザドキエルを恨むんだな』

俺は悪魔じゃない、悪魔なんかじゃない！悪魔じゃないから天使の力をまだ使えるんだ！悪魔になんてなる訳ないじゃないか！

知らない間に歯を食いしばっていたらしい俺を庇うようにヴォラクが前に出た。フォモスとデイモス、大蛇が絡み合って恐ろしい地響きが聞こえて来る。早くこいつを倒さなきゃフォモスとデイモスもあぶねえよな……

アイムだけならきつと何とかなるはずだ。こっちにはパイモンもヴォラクもいる。サポートにセーレもいるんだし、絶対に負ける訳が

ない。

問題は……契約者の方だ。

楊さんに日本語の会話が分かるはずもなく、首を突っ込む事もないが、ドラゴンと大蛇が絡み合って戦っているのを見て、少しだけ目を輝かせてみている。その光景は幼い子供がファンタジー的な物に憧れる目その物で、少し異常だ。

楊さんはアームに何かを耳打ちして、笑い合っている。これが普通の状況なら何も問題は無いんだけどな。

「ストラス、俺が聞く事訳してくれないか？なんで楊さんが悪魔と契約してるのかって」

『分かりました』

息を大きく吸い込み、楊さんに向かって大声で問いかける。何で悪魔と契約したんだって。楊さんは訝しげに俺を見たけど、アームが中国語で訳してくれたか何かを聞いた途端、不機嫌な表情になった。そして半ば吐き捨てるかのように俺に返事を返してくれた。

「別に憂さ晴らしでやったただけだ。こっちはストレス溜まってんだよ」

「え、日本語？」

「話せるよ。日常会話に支障が出ない程度に」

流暢な日本語で楊さんは話している。もしかして日本語の勉強でもしてるんだろうか。これだったらストラスの訳も必要なさそうだ。

「憂さ晴らしって……そんな単純な理由でか！？沢山人が死んだんだぞ！」

「そんなん知らねえよ。別にいんじゃない？俺あいつら嫌いだし」

楊さんの言葉に耳を疑った。あいつらって……じゃあ今回火災を起こしたのは嫌いな奴がいたからって事か？

楊さんは相手を殺したって言うのに反省の色は全く見られない。むしろ死んでいいとまで言っている。何がそうさせた……呆然としている俺を見て、楊さんは真実を語りだした。

「俺さあ、在日だったんだよね。小学生の頃まで日本に住んてた。こつち来て改名したけど本名は違う」

「それがなんの関係が……」

「親父の仕事の都合でこつちに戻ってきて待つてたのは差別だ。あいつらは日本語しか話せない俺を差別した。在日は国から出て行け、日本人の味方は売国奴だつて」

確かに中国つて日本の事嫌いだよな。よくデモとかの話しをニュースで見るけど……でもそれが同じ中国人にまで及んでるなんて、全く知らなかった。

楊さんは多分ずつとこつちに來てからイジメに遭つてたんだらう。だから中国人が嫌いなんて事を……

「それはぶつちやけ今でも続いでる。ダチはいるよ、でも俺を避ける奴は皆言う。日本の味方をするお前は国から出て行けつてな。正直俺だつてこんな国にいたくない、いつかは日本に帰つてやるつて思つてるさ」

だつたらなんで殺すまで発展するんだ……日本にくれればいいじゃないか。

留学だつて何だつてできるだろ？嫌いつて言つてる国から逃げちゃえばいいじゃないか。

「もううんざりなんだよ。俺が在日だって事を理由にバイトに受からないって事なんか当たり前の様にあつたし、推薦で落ちた事もあつた。こんな屑達の中で生活するのなんか飽き飽きなんだよ。その時こいつが現れた、楽しいだろ？自分を散々こきおろした人間達を真っ赤に燃やしていくんだ。あいつらの国旗の色と同じに」

どれだけの差別を受けてきたかは知らないけど、悪魔と契約してまで嫌悪してるんだ。何を言っても無駄なのかもしれない。

アイムは炎をまき散らしながら俺達に近づいて来る。

『さあ死にたい奴から出てこい。真っ赤に燃やしつくしてやる』

『……馬鹿馬鹿しい』

ヴォラクが一言つぶやいてアイムに向かって走っていく。そしてそれを援護するようにパイモンも走りだした。

さっさと仕留めないとフォモスとデイモスが危ない。てか巨大なドラゴンと大蛇がドツタンボタンやられたら、こっちも気が気じゃない。

時々こっちに大蛇の尻尾やフォモス達の羽がぶつかりそうになって慌てて避ける始末だし。

目の前ではパイモンが炎を振り回すアイムと闘ってるし。アイムは松明の炎をパイモン達に撒き散らしている。

『お前のペットがいなければ、お前の戦闘力等たかが知れている。所詮貴様はアミーの下位互換悪魔だ』

『失礼な野郎だな。だが現実はそのうらな、俺の能力は炎よりは法律がメインだからな』

次第にヴォラクとパイモンに距離を詰められて苦しそうに顔を歪めるアイム。その姿を楊さんは不安そうに眺めていた。

「我和他???了!(アトム、そんな奴に負けんな!)」
「正如???要……但是我很痛苦。(そうしてえけどよお……やつ
ば俺に2匹相手はきついつてことだな)当我?没来是?定的。?的
?人(ヴォラクが来た時点で俺の不利は決まってた様なもんだ。く
そ、忌々しいドラゴンだぜ)」

ヴォラクとパイモンの剣が体中をかすり、小さな切り傷が増えてい
くアトム。でもそれはこつちも同じだ。パイモンとヴォラクも所々
にアトムの炎を食らって火傷を負っている。
それでも有利なのは変わらないんだろうけどな。
アトムは悔しそうに舌打ちをして松明を持ち直した。

「降参か?」

「俺は最後までてめえ達には屈しねえ。腰抜けの裏切り者共が!偽
ンチクライスト
の救世主なんぞに手え貸しやがって!」

アトムはパイモンとヴォラクが向かっているにもかかわらず、真っ
直ぐ松明を向けている。そしてアトムの位置と俺の位置が一直線に
なる。

まさかこいつの狙いは俺なのか!?

「てめえだけは道連れにしてやるぜ!最後の審判で俺達が次の世界
を手に入れる為にも、天使共にてめえは渡さねえ!」

アトムが吹いた炎が一直線に俺に向かってくる。ちよ……嘘だろ!
?どうすればいいんだよ、どう防げばいい!?魔法を使いたくても
間に合わない。

避けたくても足が動かない、このままじゃ俺は焼き殺される!
咄嗟に手を前に突き出して必死に祈った。サタナエルの炎に頼った。

これがあれば助かるって思った。

『拓也！』

ストラスの声が聞こえたとき、全身を熱気が襲ったけど、不思議と自分が焼けている感覚は得られなかった。恐る恐る目を開けると全身火傷を負い、体中から煙が出ているアイムが直線状にいた。何が何だか分からない。俺は一体何をしたんだ……？

『拓也……貴方サタナエル様の……』

ああ、俺はサタナエルの力を使ってしまったんだな。その炎がアイムの炎を弾き飛ばして、あいつを攻撃したんだ。掌には真っ白な光のように輝いている炎の残骸が残ってる。

冷静に考えたけど体は言う事を聞かず、座り込んでしまった俺をセーレが支える。

「拓也、拓也！」

「……大丈夫」

そう言うしか出来ない。過去に同じサタナエルの炎を喰らって全身が焼けただれた悪魔べへモトと同じように全身に火傷を負い、膝をついたアイムを楊さんが支えようとしたけど、パイモンとヴォラクに邪魔された。パイモンが暴れる楊さんを押さえ込み、ヴォラクに召還紋を書くように命じている。

『拓也、手伝って』

「……俺、が」

『そつだよ、他に誰がいんだよ』

ヴオラクに腕を引かれて言われた通りに描いていく。その間も体の震えは止まる事はなかった。

もう俺はある程度使いこなせるのかもしれない。サタナエルの炎を……もう俺は人間じゃないのかもしれない。恐くて聞けないし、誰も教えてくれないから分からないままだ。

でもアームは言っていた。次第に天使の力が使えなくなるって……その時、本当に俺は悪魔になったって事だろう。嫌だ、嫌だ嫌だ嫌だ！

召還紋を描き終わった俺は後ろに下がって、光景を見守る。楊さんは嫌がったがパイモン達に半強制的に契約石を返し地獄に戻す儀式をさせられている。

アームが消えて空間も消えていく。ゼミ室に再び戻った俺達を楊さんは非難するような目で睨みつけている。

「よくも好き勝手やってくれたな……」

「でも俺、ただ……」

「ははっ……てめえは俺よりも遥かに凶悪だよ！この化け物が！」

その言葉に全身が縫い付けられたように動くことが出来なくなり、瞬間に顔に衝撃が襲った。上手く体勢が保てず倒れこんでしまった先には楊さんの姿があり、その時に殴られたんだって事を理解した。楊さんは殺気立った目をして、その言葉を残してゼミ室を出て行ってしまった。そして俺たちだけが取り残される。皆が心配そうにする中、何とか笑って無事をアピールして立ち上がったならサーレに腕を引かれて、俺たちもすぐさまゼミ室を出た。殴られた箇所はジンジンと鈍い痛みが消えなかった。

次の日も中国の火災のニュースをやってたから楊さんは自主はしていないみたいだ。裁判でも無罪が確定してるし、今更自首してもな……

…そんな事はどうでもいいんだ。

自分の手のひらを見つめる。何の変哲もない手なのに、この手から最強の悪魔であるサタナエルの象徴ともいえる光のような白い炎が飛び出す。

そしてあいつは目を覚ますんだ。目を覚まして俺を殺しに来る。

とてつもない恐怖が包み込んだけど、誰にも言えなかった。口にす
るのも怖かったから……でも俺は確実に追い詰められているという
のは感じた。

第6話 偽りの愛情

「うえ〜授業ってこんなにきつかったのかあ……」
「そりやお前、夏休みあんだだけ休んでりや学校嫌になんのも無理ねえよ」

オーラルの先生が黒板に教科書の文章に載ってる慣用句の訳を書いて行っている。
それをさつさと写し終わり、後ろの席の上野に振り返って話しかければ、上野は笑って返事をした。

6 偽りの愛情

夏休みの補講で結構範囲が進んだようだ。やっている内容がいまいち理解できない。

光太郎にもらったノートを見直しながら何とかついて行ってるけど……こりゃちゃんと勉強しなきゃどうしようもないな。ノートの隅っこに落書きをしながらチャイムが鳴るのを待つ。

この教科さえ終われば今日の補講は終わりだ。帰りにパイモン達がいるマンション行く予定なんだけどね。

タイミング良く授業の終わりを告げるチャイムが鳴り、先生が残りの内容を早口に言って授業が終わった。授業が終わり次第、帰りのHRも無しで学校は終わりだ。置き勉する教科書を机に入れて、何冊かの教科書をカバンに詰めて席を立ちあがった。

「帰んのか？」

「うん」

「そつか、明後日で補講終わつからさ、8月終わる前に皆で遊ぼうな」

「おー遊びてえなあ！遊ぼうや」

上野とそんな会話をしてカバンを背負つて光太郎の席に向かった。

光太郎は毎年受ける夏期講習を今年は受けなかったそうさ。俺と中谷を探す為に時間を割いてくれてたらしい。

光太郎の家は親父さんが大きな貿易会社を経営してて、光太郎に会社を継いでもらうため、勉強にとてもうるさいし厳しい。そんな親父さんを説得してまで俺達を助けようと頑張ってくれてたんだ。

そんな事本人は一言も言わないんだからな……光太郎はそんな奴だ。光太郎もカバンを背負い、席を立って藤森達に手を振った。

「結局悪魔探しまた始めんだつてな」

マンションに寄る為に歩いている道で光太郎がぼつりと呟いた。まあそつだろうな、最後の審判を止める為には結局はそれじゃなきゃいけないんだもんさ。

悪魔を倒す以外に方法は無い。また振り出しに戻ったとしても、ソロモン72柱の悪魔も残り半分を切ってるんだ。

言うなれば今からが後半戦だ。

光太郎は少しだけ眉を下げて、真つ直ぐ前を見つめた。

「こないだお前がさ、アスモデウスと話してる時、パイモンが言ってた。今までは前哨戦だつて。これからは今までよりもっと血生臭くなるつつてた」

「光太郎？」

「これからさ、ソロモン72柱の六大公つて奴らが恐らく俺達を襲つてくるつて。そいつらはソロモンが悪魔の中で最強だつて……」

その話はストラスから聞いた。ソロモンの悪魔の中で最強の奴らつて。悪魔の王を意味するサタネルの称号を持つ奴だっっているらしい。俺達はその六大公に入っていない悪魔フォカロルにコテンパンに負かされた。その結果、俺は地獄に連れて行かれて一緒に今まで戦ってくれた中谷を殺された。それよりも強い奴と戦わなくちゃいけないんだ。その話を聞くだけで背筋に寒気が走る。

でも地獄で他のサタネルの称号を持つ悪魔達に襲われたときだってアスモデウスの力を借りてだけど、現に何とかなったんだ。今回もきつと何とかなる。

最後にはハッピーエンドが待ってるはずなんだ、だからそれを目指して行けばいいんだ。

光太郎と話をしている内にマンシヨンが見えてきた。俺達はマンシヨンの中に入り、インターホンを押した。

「拓也、光太郎、いらっしやあい！」

玄関を開けて飛び込んできたヴァルを受け止めてマンシヨン内に侵入する。ヴァルをそのままズルズル引きずった形になったけど小さな女の子だ、重いはずもない。

パイモンがこっちに視線を向けて挨拶して、アスモデウスも軽く頭を下げた。

アスモデウスはまだ溼と契約するのを止める気はないんだろうか。アスモデウスは強い、あいつの力があつたら悪魔を倒すのだったうまくいきそうなのに……溼を巻き込みたくないから必然的に溼と契約してるアスモデウスを連れて行くのだったって困難になるはずだ。

渋い顔をした俺が何を考えているか気付いたのか、アスモデウスはこっちに視線を寄こした。

視線を逸らした俺にあいつがどんな表情をしていたかは分からない。その気まずい空気を壊すかのように、パイモンがパソコンを閉じた。

「悪魔見つけたのか？」

「怪しいと思っっている物ならば」

「教えて」

「分かりました。先週、フィンランドの大富豪であるオラヴィ・ハールスの息子のラウリ・ハールスが一般女性と婚姻したと言う情報がフィンランドの地元情報局で話題になっています。このオラヴィ・ハールスはフィンランドでも有数の貿易会社の社長です」

フィンランドの大富豪の息子が一般女性と結婚……急に言われたら頭に？が浮かぶけど、1つ1つ整理していく。

結婚って事は犯人の悪魔はヴァルやシトリーみたいに恋愛系の悪魔って事なのかな？

シトリーは相手に好意を持たせる力、ヴァルも好きな人間を振り向かせる力を持つてる。今回もそういう類の能力を持つてる悪魔なのか？

でも一体どっちが契約してるんだろう。親父の方か？それとも息子の方か？話をもう少し聞かなきゃ分からないよな。

「息子のラウリ・ハールスが結婚した女性はレイラ・ハンスキ。オラヴィの会社で働く女性だったみたいですね。1年間の同棲を経てのスピード婚だったみたいです」

「へえ……」

「しかしレイラはラウリの事を快く思っていないかったという情報が同僚達から多く聞き取れ、買収されたのではないのか？そう騒ぎたてるメディアが多いようです。なんにせよ、調べてみなければ分かりませんが」

フィンランドか。また遠いなあ……えーと北欧だろ？って事はこの季節だから白夜って事になんのかな。

2か月前くらいにデンマーク行って、数日前に中国だったのに、今度はフィンランドか。なんだか本当に世界行脚だな。

自分の手をまじまじと見つめる。こつやって見ても自分が悪魔になっただけでいるなんて信じられない。もちろんパイモン達だってパツと見ても悪魔の様には見えない。

俺もそうなっただけでいるんだらうか……

そう考えれば考えるほど恐ろしくて、すぐに思考を停止させた。

詳しい事はまた連絡すると言われて、やる事もなかったので光太郎とそのまま大人しく帰路に付く。その間、会話は少ない。

どことなく光太郎は俺に何か遠慮しているように感じる。その理由は分からない。

「なあ拓也」

「ん？」

立ち止まった光太郎に視線を向ける。少しだけ震えながらも光太郎は俺を見つめていた。

夕日に照らされているお陰で表情までは眩しくて確認できない。

でも気まずそうにしている。それだけは分かった。

「わりい、何でもない」

「光太郎？」

「何でもないんだ……何でも」

良く分からない。光太郎は明らかに無理をして笑って、横を通り過ぎてしまった。

後から聞いても答えしてくれない。一体光太郎が何を言いたかったのか、結局分からないままだった。

家に帰りついて、ベッドに横になる。なんだかこんな当たり前前の生活さえ数週間前までは出来なかったんだと思うと恐ろしくなる。

『拓也、帰っていたのですか』

部屋に顔をのぞかせたストラスが俺の腹によじ登る。もうこいつの特等席になっている感じた。そのまま何をする訳でもない、2人でポーっとするだけ。

母さんが飯を作っていて、鼻を刺激するいい匂いが室内に入ってくる。もうそんな時間なのか。でもその匂いもテレビの喧騒も、なんだか遠い世界の様に感じる。

目の前にあるのに届く事が亡くなった世界の様な……

「不思議なんだ」

『何がです?』

「やっと帰ってきたんだ元の世界に。ずっと帰りがかった、でも俺にはこの世界が相応しくない気がする。ずっと人間の池上拓也として生きてきたのに」

『……………』

「あの暗い世界に吸い込まれるのが、一番いい終わりなんじゃないのかって思う」

想像して言ってるだけだから、まだ冷静で客観的に言えるけど、実際その時が来たら俺は泣いて嫌がるんだろうな。

でも思うんだ。全てが終わったとしても、俺はもうサタナエルの子どもで人間じゃない。そんな俺が人間の世界にいてもいいのかわかって思う。

『……………では全てが終わった時、私と共に地獄に向かいますか?』

「え?」

『私は貴方と共にどこまでも向かいます。人間の世界以外の場所ならば……悠久の時を過ごすのは、相棒がいなければ辛い物です』
「それもいいかもな」

嘘、本当は嫌だ。行きたくなんかない。

でももう分からなくなってしまった。自分自身の存在も何もかも。直に俺はサタナエルの力が増幅されて天使の力が使えなくなる。そしてそれは自分が完全に悪魔になってしまったことの証明になる。その時、意識までも持っていていかれてしまうのか？そう考えると怖くなってきた。

黙った俺にストラスはどこか寂しそうに、遠くを見つめるように声を出した。

『変わりましたね貴方は』

「そう?」

『ええ、過去のように恐怖に泣き叫ぶ事も無くなった。1年前は戦うのが怖い、痛い思いをしたくないと泣いてばかりだったのに。今も戦いを恐れて隠れる癖は変わりませんが』

「泣き叫ばないのはいい事なんじゃない?」

『ええそうですね。ですが……少し人間味が無くなったようにも感じます』

そうなんじゃないのかな。だってもう俺は沢山の人や悪魔を傷つけてきた、大怪我を負わせてきた。

普通の世界なら逮捕されて死刑になってもいいんじゃないかってぐらい、色んな人を傷つけた。そして生まれて初めて他人を殺した。でもそれをしなければいけないって事になっているんだ。あの子を殺しても誰も責めることはなかった、仕方ないって皆が励まして同情してくれた。そんな中の中心に居れば人間味が無くなっても無理はない。

元々人間味が何かすら、俺には分からなくなってきたよ。

「兄ちゃん、ご飯だつて」

扉が開いて直哉が扉から顔をのぞかせる。そつか、飯できたんだな。ソロモンの指輪を手に入れて1年が経つて、小5だった直哉はもう小6だ。来年になれば中学生になる。それまで俺は生きている事が出来るのかな。この世界は崩壊したりしないんだろうか。

たった3週間程度しか顔を合わせていなかっただけなのに、直哉はこんなにも大人っぽくなつたのかな。

良く分からない。

考えるのを止めて笑顔で接して1階に降りる。考えたって今は答えなんか出やしない。

次の日、土曜で休みだった事もあり、パイモン達と夕方に一度フィンランドに向かう事にした。まだ契約者を探すだけだからアスモデウスは付いて行く気も無いらしい。

その結果、いつものメンバーだな。

俺と契約してるストラス、パイモンとセーレ、1人で行動が出来るヴオラクで行く事になった。見送ってくれたヴァルに手を振って、俺達はフィンランドに向かった。

やっぱり今の季節だとデンマークの時と同じ白夜つて言う現象のお陰なのか、まだ朝なのにフィンランドは少しだけ薄暗い。

それにしても今からどうするつもりなんだろうな。

「パイモン、来たのはいいけど、やる事あるのか？」

「今からヘルシンキのエスプラナディ公園と言う場所でオラヴィの演説会があるそうです。それに息子のラウリも出席すると聞きまし

た。そこに行ってみましょう」

どうやって調べたのかはわかんねえけど、やっぱりパイモンはすげえな。パイモンがいなかったら悪魔探しは成り立たないだろうな。

ジエダイトが着陸した場所はその何とか公園の近くだったらしく、徒歩30分程度で目的の公園に辿り着いた。でもそこには沢山のギヤラリー。やっぱり大物の演説会だけあって、メディアも注目してるんだろくな。

立ち見だった為、いい場所を取れなかったけど何とか見えるって場所をゲットした。背の小さいヴォラクはセーレにおんぶしてもらって眺めている。

その時、50後半のおっさんが特設ステージに上がり拍手が起こる。その後ろには女の人と男が立っている。もしかしてあれがそうなのか？

パイモンが素早く双眼鏡を手にして、装備する。

「え、何それ持ってきたの？」

「そうですね。相手が相手だけに中々近寄れませんから、すみませんが1つしかないので我慢してください」

「あ、ああいいよ。そこまで見たい訳じゃねえし俺」

おっさんはフィンランド語で何かを話してる。でもフィンランド語が勿論分からないから、さっぱり分からん。他の人はうんうんと頷いてるけど、言葉の壁は厚いよなあ……頷きたくても内容が分からないんだもん。なんだか暇だなあ……

ボケーっと1人でいい天気だと思いつつ空を見上げていると、パイモンが双眼鏡を目から離し、考え込んだ。

「パイモン？」

「主、やはりラウリと言う男、契約していますね。契約石であるオニキスのバングルを身につけています」

「それってどんな悪魔なんだ？」

「悪魔はゼパールと言う悪魔です。主もお察しの通り女性を恋愛で自分の虜に出来ると言う能力があります。足を引きずった兵士の姿をしている悪魔です」

その話を聞く限り、ある程度戦闘が出来るって事になる。兵士とか騎士って今まで戦った経験上、上位の悪魔で強い奴が多い。じゃあやっぱりあの女の人は操られてる、その可能性が高いんだな。でもパイモンは渋い顔をしたままだ。

「早く助けないと女の人レイラさんだっけ？危ないのか？」

「それなんですけど……私が見る限りでは彼女は悪魔の魔術にかかっていないように感じます」

訳が分からなく手首をかしげた。

だってゼパールって悪魔は女性に恋愛感情を植えつけることが出来る悪魔で、レイラさんがラウリって奴を嫌ってるって話を同僚達が話してて……その話を繋げると、ゼパールがラウリの命令を受けてレイラさんを操っている結論にしかならない。

でもパイモンはレイラさんが操られてないって言う。

「彼女は至って正常の様に見えるんです。おかしい話ですが……」

「じゃあ違う女に力使ってるって事お？」

「でもそれだったら話しが合わないだろ？レイラって人はラウリって男が嫌いってパイモンも言ってたじゃん」

「主、今回はヴォラクの仮説が正解だと思います。とにかくあの女にはゼパールの力はかかっていない。これだけは言えます」

良く分からない。

じゃあレイラさんは自分の意志で結婚してるのか？嫌いって言う噂が嘘なのか？

ヴオラクの言うとおりだったとしたらラウリはどうしてレイラさんと結婚したんだよ。他の女の一日から使うんなら、レイラさんじゃなくて、その人と結婚するはずだ。手に入れたい女性がいるとしたら結婚しているレイラさんじゃなかったのか？時期だってぴったりだ。

どうしてレイラさんと……政略結婚って言う訳でもなさそうだし。一体どうなってるんだ？

ステージ上ではラウリはレイラさんを気遣っている風に感じる。その姿は誰が見ても優しい夫その物だ。

でも何かが違う。パイモンはそう言ってる。ここからじゃ遠すぎて良く見えなくて分からない。分かるのはラウリって奴が契約をしているって事だけ。

「ストラス、何か分かるか？」

『いえ、私には何も……とにかく調べる必要はありそうですね』

その時は気付かなかった。

世界は少しずつ異変に気づいていたと言う事に。

シトリー side

「シトリー大変だ！」

「なんだよ光太郎、人を呼びだしておいて」

光太郎に呼び出されてスタバで待ち合わせたのはいいけど、肝心の光太郎はかなり慌てている。まあそれもそうだ、こいつは遅刻してきたからな。自分から呼び出しておいて遅刻とは、いいご身分なこ

った。

その手にはiPhoneが握られている。訳が分からない俺に光太郎は画面を見せてきた。そこには某掲示板のスレッドが立ち上がっている。

「世界の終焉のカウントダウンをするスレ……なんだこりゃ。しかも50スレって結構いってんな」

「この中身だよ！」

光太郎がスレッドをクリックし、中身を開く。この店ってWiFi i繋がってんのか。

変な所に感心して茶化していたけれど、それも束の間だった。

「……なんだよこれ」

そう言うしかなかった。そのスレッドの内容は最後の審判についての考察、そして俺達ソロモンの悪魔に対する内容だった。

内容は俺達ソロモンの悪魔が世界を荒らしまわり、そして最後の審判が近々下るというものだった。余りにも的確な内容に動揺する。どうして人間がこの事を知っている？

神話や悪魔、オカルトが好きな奴らが作ったスレだったとしても、どこから情報が漏れた！？

“ イエス・キリストがもうじき降臨する。俺達は皆死ぬんだよ”

“ 悪魔とか信じてなかったけど去年の上尾の連続殺人事件ってソロモンの悪魔の仕業なんだろう？どの悪魔なんだ？”

“ 悪魔マルファス。調べた結論は確かこいつだった”

“ 胸熱だなww悪魔信者な俺のどこにも来てくんねえかな”

“ ゆとりは黙ってROMってる。でも本当ならマジばねえな。最後の審判っていつ下るんだ？”

“知るか馬鹿。でもどっかの外国のサイトじゃ日本が一番最初に滅亡って話聞いた。日本に一番ソロモンの悪魔がいるんじゃないか
ってよ”

“荷物まとめて外国に移住します”

“いてら”

「この情報……」

「掲示板内のスレだけだとさ、海外の掲示板でも一部の奴らがスレッド作って盛り上がってたんだよ」

「騒がせとけよ。どうせ情報も無いんだ」

「そう言う訳にはいかねえんだよ……」

光太郎が次に見せてきたのは掲示板に投稿されていた写真。それはマルファス、フルフル、シャックスの写真だった。

どこでこれを手に入れたんだ！？どこの誰かが悪魔の写真を隠し撮ってネットに晒した。その結果、ここまで一部で盛り上がる状態になっちまったんだろう。幸い、俺達の写真は確認されなかったが、これは一大事だ。これからは周囲の目も気をつけなきゃ、俺達が晒される番なのかもしれないねえ。

「下らねえ事するな。くそっ……」

「どうすんだよ……」

「どうするもこうするもねえだろ。暫くは様子見だ。変な行動はしないに越したことは無い」

「そうだけど……」

今まで以上に慎重に行かなきゃな。

それにしても段々面倒くさい事になってきたぜ。つたく！

第7話 憎みあう夫婦

「セーレ、あの女性をお前はどう思った？」

「どつって言われても、俺は余り見えなかつたからなあ。でも不思議な感じだったよ。まるで何か禍々しい物に守られている様な……パイモンもそう思ったんじゃないか？」

「では俺と考えが同じか？」

「ああ、そうだね」

7 憎み合う夫婦

「フィンランドって綺麗だよな」

パソコンでフィンランドの観光情報を見ている俺を洩が呆れた顔で見ている。でもやっぱ北欧って綺麗だよな。街並みがカラフルで……是非観光に行ってみたいけど、パイモンに怒られそうだし。

そんでついぞと言つては何だけど、例の契約者っぽい奴も調べてみた。今の所、息子は平社員らしいけど、結局は父親の会社だ。社長の座は約束されてるんだろうな。

出身大学もフィンランドで一番偏差値が高いヘルシンキ大学を卒業、根っからのエリートって訳だ。女の人の情報も違うサイトに載つてた。同じ大学で、かなりキャリア志向の強い人らしい。でも結婚したらラウリの家の事情で強制寿退社させられた後は子育て一辺倒なんだってさ。それもどうかと思うけどね。

俺が調べて分かったのはこれだけ。元々パソコンだって基本触らなから、これだけ調べたら十分。後はパイモンがやってくれん

「フィヨルドってフィンランドだっけ？」

「ノルウェーでしょ」

「あ、そっか。あはは」

しまった、溇の前で馬鹿を露呈してしまった。

溇は複雑そうな表情をして、パソコンの画面を眺めている。話しはヴアルからある程度聞いたらしいけど……

なんだか今回も契約者にも最終的にはボロクソ言われそうだ。傷つかないって言えば嘘になるけど、気にしない振りをするしかない。じやなきや俺はショックで泣いてしまいそうだから。

「ねえ拓也……ヴアルちゃんがね、すつごく警戒してるの。アスモデウスの事」

不意に溇の声が響いた。でも内容を聞いてなんだか胃の辺りがむかむかしてくる。

返事をしない事に対して気にした様子も無く、溇は言葉を続けた。

「近寄らない方がいいって言ってたけど、正直あたしはアスモデウスが悪い人には見えない」

「悪い奴ではないと思うよ。俺は好きじゃないけど」

「……そう」

アスモデウスは命の恩人だ、こんな言い方は助けてもらって最低なのは分かってる。でも好きになれないのは本当。

多分、アスモデウスが溇と契約してるからだろうな。不安なんだ、アスモデウスのせいで溇が危険な目に遭いそう……俺なんか言えた事じゃないけど、アスモデウスを狙って他の悪魔が一杯来そうで不安だ。溇が変わってしまいそうで怖い。

だからあいつの事を好きになれない。でも悪い奴じゃない、それだけは分かる。

「ストラス達は好きなのに、アスマデウスは嫌いなの？」

「嫌いまではいかないよ。でも好きではない」

「どうして？」

「さあ、多分生理的にじゃない？」

理由は言いたくなくて誤魔化したら、なんだか酷い奴みたいになった。でも漣は何も言わなかった。俺を非難する事もしないし、アスマデウスを庇う訳でもない、ただ俯いただけだった。

そうだな、悪い奴ではないよな。でも好きになれないんだよ、仕方ないだろ。

「俺、今からマンション行くわ。今日フィンランド行くんだ」

「あたしも行っていい？」

「……別にいいよ」

「あ、漣と拓也だー」

ヴアルが俺に飛びついたのを抱き上げてリビングに向かう。

リビングではパイモンがパソコンで何かを調べていて、それをストラスが眺めていた。そしてソファでアスマデウスは座って、ボーっとしていた。

そんなアスマデウスの近くに漣が歩いて行く。少しだけカチンとした。

「なんだか漣アスマデウスに構ってばっか。つまんない」

「見張つとけよヴアル、あいつが漣に何かしでかさないか」

「常に見張ってるわよ〜でもやっぱ怖い。漣がサラの子孫って話を聞いてちゃってから……」

ああ、パイモンから説明受けたな。サラって言う女性は漣の遠い遠い先祖だ。その先祖がかつてアスモデウスと契約して恋に落ちた。でもサラの父親がサラを政略結婚の駒として使おうとしたことに反発して結婚した夫をアスモデウスに命じて初夜の晩に絞め殺す事件を起こした。

最終的にはアスモデウスは天使ラファエルによって地獄に戻されたけど、シヨックで気が狂ったサラはラファエルを従えていた青年トビトを恨み、トビトを呪う為にアスモデウスの契約石を呪った。

周囲に押されてトビトと結婚したサラが呪った物は子孫。つまり自分とトビトの子供……それは男児1人のみの出産しか許さない。それ以上の子供は何かしらの不幸でなくなるといふ事。でも子孫が途絶える事も許さない、生まれた男児は次の男児が生まれるまでは呪いに守られて死ぬ事が許されない。

その理由はいつ下るかも分からない最後の審判で、トビトの血の混じった子供をアスモデウスに殺させて自分たちの子孫の終焉を終えたかったかららしい。こう考えると怖い女性だよな。

でも漣のひいひい爺さんが黒魔術結社に入ってる、アスモデウスにかかったサラの呪いを解いたから、女の漣が生まれる事ができた。だからこそ、アスモデウスはサラの子孫の漣を守るために悪魔を裏切って、俺を助けてくれた。

だから漣はアスモデウスを構うのか？自分の先祖が契約してたから良く分からないけど……

「主、早速向かいますよ。今日中に出来れば決着をつけたいですね」

「シトリーとヴォラクは？今日光太郎暇って言ってたんだけど……」

「メールしても返事こねえし」

「……あいつらは別の事を頼んでいます」

パイモンはそれだけ言って、続きは教えてくれなかった。

溇が付いていきたいって言ったから、ヴァルとアスモデウスも付いて来る事になった。警戒心丸出しのヴァルにアスモデウスがため息をついたのが視界に入る。

それを困った顔で溇がなだめていた。

「でもさ、シトリーいなくて大丈夫なのか？聞き込みつつたらシトリーだろ」

「そうですね。まあ大丈夫でしょう……今日は奴らの家に直接殴りこみに行くつもりです。ラウリとレイラは既に父親から家を貰って使用人数人と2人で生活しています」

「ちょ、直接って……無理に決まってるだろ！」

「それが無理ではないんですよ。本人たちに話を通せば何も無理な話ではない」

だって契約してるのはラウリだろ？使用人やレイラにばれたら俺達は変質者でつまみだされるし、下手したら警察沙汰じゃないか。

それをどうやって行くっていんだよ……

パイモンが上手くやってくれる事を信じ、俺は後を付いて行く事にした。

着いた先はプール付きの大豪邸。そのインターホンを押すのは躊躇われたが仕方無い。

セーレが押して使用人が出て来るのを待っていると、出てきたのは20代前半の男性だった。スーツをピシッと着こなした姿は執事みたいだ。そいつは勿論見覚えの無い俺達に首をかしげ、取材はお断

りと釘をさしてきた。でもそこはパイモンだ。正直にラウリに会わせると言い放った。

お前ハツキリ言いすぎだろ！？そんなの受け入れてくれる訳ねえじやん！！

「Ei kokousta koskevan miehesi aikataulu. (旦那様のスケジュールには会談のご予定はございませんが)」

「En ole koskaan tavannut. (会談のつもりはない) Te olisti tuntu mista kysymys. (お前達の婚約に疑問を持ってきた) Laittakaa siihen. (どけ、力づくでも行かせてもらうぞ)」

セーレに訳してもらってパイモンが脅しをかけるような言い方をしている事を知る。そんな言い方したら通報されるのが関の山だ。でも使用人は何かを考え込み、少し待ってくれと言って屋敷に入っていた。絶対通報するフラグだろこれ。

「逃げなくていいのかよ……」

「なぜ逃げる必要があるのです？あの男は私達を屋敷の中に招き入れる……絶対に」

どうしてそう言い切れるんだ？

それ以上パイモンは教えてくれなかった。後ろでは溼が不安そうな顔をして、ヴァルが溼の手を握っている。アスモデウスはその後ろで待機していた。

でもその射抜くような視線が少しだけ怖くて後ろを振り返れなかった。

暫くして、そいつが戻ってきて何と門を開けて俺達を招き入れた。それにパイモン達が礼を言っ中に入っていく。慌てて俺も追いか

けたけど、なんで入れてくれたんだ？

「なんだって急に……何なんだあいつ」

『調べたのですが、あの使用人は代々この屋敷の使用人をしている家系の息子みたいですが、レイラと恋仲ではないかと言う噂があるのです。パイモンはそこを利用した、そう言う感じですね』

使用人が後ろを振り返らないのと、日本語が分からないのをいい事に普通の声で堂々と話してたけど、今日は使用人がいないのかな？こいつ以外に見当たらないけど……

屋敷に通された俺達は広い部屋の1室で待っていてくれとだけ言われて、再び待たされた。そこには一杯沢山の絵が飾ってある。絵の隅に名前が書かれているが、全部同じ名前だ。

この部屋の絵は一体誰が描いたんだろう。

「あの使用人だな」

アスモデウスが俺の近くに歩いてきて、絵をマジマジと眺めている。俺の目の前に飾られてある絵には綺麗な女の人が描かれている。多分これレイラって奴だよな。パソコンで調べた奴と良く似てる。似顔絵なのか？

「使用人ってさっきの？どういう事？」

「ヴァルトって名前が書かれてる。あの使用人の名前さ。あいつは絵画系の専門学校を卒業してて、趣味は絵を描くことらしいからね。代々この家の執事をやってるけど、いつかは画家になって有名になるのが夢らしい。執事はお金を貯める手段としてやってるだけらしいよ」

「詳しいな」

「パイモンが全部調べたんだ。どうやったのかは俺にも分からない」

あいつ絶対ハッカーとかなれそうだよな。どうやってここまでプライベートな事を調べたんだ？

使用人のヴァルトに出されたお茶を最初は睡眠薬でも入ってるんじゃないかと警戒したけど、ストラスが大丈夫だって言うから、それを飲んで待つ事30分程度。いい加減待たされて少しだけイライラしていた所で部屋に入ってきたのは、厳格そうな男だった。遠くから見ても近くで見ても怖いな。

少しだけビビってストラスを抱きしめる腕に力がこもる。そしてソロソロとソファの中心から隅っこに座っているヴァル達の位置に避難。

パイモンがラウリが座ったのを確認して、パイモンは単刀直入で話を切り出した。

「Onko rannerengas mist? saits en? (そのバングルはどこで手に入れたのですか?)」

「Mitt? teet, ett? tulet kysy?」

(そんな事を君は聞きに来たのか?)」

「Kyll? . Niint? rkkeit? . (はい、大事なことなので)」

表情を変えずに淡々と自分の聞きたい事だけを述べるパイモンにラウリは苛立った表情を浮かべた。でもどうしてこのおっさんは俺達と話そうって思ったんだろう。

俺だったら使用人が勝手に中に通した見た事もない外国人がいたら絶対怖くて会いになんか行かないけどな……ラウリもぶつぶつフィランド語で何か文句みたいなのを呟いてるから、もしかしたらヴァルトにいい様に言われたのかもしれない。

いやでも使用人がそんなことしたらクビになっちゃうわけで……ますます分らない。その間にもラウリとパイモンの会話は進んでい

た。

「Sain varastossa. Mit? haluat
tehd? valituksen? (店で手に入れた。何か文句
があるのか?)」

「Onko se todellista? (それは真実ですか?)
」

急にラウリが目の色を変えて、席を立ち上がる。

それにビックリした俺と溲も少しだけ座っていた体制が崩れた。ラウリは表情を歪ませ、息が荒い。パイモンが何を言ったかは知れないが、逆鱗に触れたみたいだ。

「Jos luulet tulivat kuulemaan
mit? paska. (何を聞きに来たのかと思えばくだら
ない) Tule ulos talosta nopeasti. (さ
っさと屋敷から出て行け) Jos ajattelitte
irallisen vaimon, muttata? ysin
tehoton. (妻の関係者かと思えば、全く見当違いだ)」
「Pid?n te virkamiehi? . (私は貴方達の関
係者のようなものです) L?sn?ollessa maailm
an ihmisten keskuudessa, jotka
eiv?t usko. (この世の存在ではない者を信じている
者同士)」

フィンランド語が分からないから、緊張してるしかする事なかったけど、空気が凍ったのは感じた。

ラウリは顔を青ざめさせてパイモンの胸倉を掴んだ。ちよっ……急
に何すんだよ!

思わず手が出てラウリからパイモンを引き放したら、ラウリは余裕

の無い表情で告げた。

「T?m? on vain huhupheidenn ja
hyppp??t jokku. (お前達の狂言を今回だけは大目に見
てやる) Mutta hetikunne ulos. (だか
らさつさと出て行け)」

無理矢理部屋の外に出されて玄関まで連れて行かれる。その時、一瞬廊下で女性の姿を見た。間違いない、あの人がレイラだ。でも可笑しな事に、そいつはラウリを見て笑っていたんだ。全く愛情の欠片も無い様な眼で……その目が恐ろしくて声も出なかった。

屋敷の外に追い出されて門は固く閉じられた。一体これからどうすんだよーあの怒り方は簡単には許してくれないぞ。

でもパイモンはしてやったり、どや顔をして屋敷を眺めている。

「何どや顔してんだよ。入れねえんだぞ」

「どや顔等していません。ただ焦ったラウリが事を起こすのを待っているだけです」

事って……

首を傾げるしかない俺達にストラスとパイモンだけは表情を変えず、冷めた目で屋敷に視線を送っていた。

ラウリside

「Layla! (レイラ!)」

「Lauri Mik? h?t?n?? (どうしたのラウリ?)」

あいつらは確実に私が何かしら悪魔と関わりを持っていると言う事を感じている。契約石の事をしつこく聞いてきたり、似た者同士と言ったり……奴は確実に悪魔の事を知っているし、嗅ぎ回ってい

る。

まずい、この事がマスコミにでもばれたら大事になる。さつさと見返り分の報酬を渡して、レイラに呪いをかけなければ……私しか見えなくなるように。

レイラは過去の憎しみの表情とは180度違う優しい笑みを浮かべているが、これでも悪魔ゼパールの魔術は不完全だと言っていた。なぜかレイラには効きが悪いらしい。それほどまでに私を憎んでいるのかは知らないが、今のままだと悪い予感しかない。ゼパールとは縁を切らなければ……

レイラの肩に手を置いて笑みを作る。一瞬でレイラは私を愛すはずだ。私だけを見るはずだ。

「Layla, min? rakastan sinua. (レイラ、私はお前を愛している)」

「Min? my?s. (私もよ)」

「Joten me rakastamme toisiamme ikuisesti. (私達は一生愛し合える) Sulje silm? sinulle vain hetki. (目を瞑つてくれ。一瞬でいい)」

レイラが言われた通りに目を瞑る。そして私は呼んだ。この世の者とは違う存在を……

「Zeparu... (ゼパール……)」

私の後ろに赤い鎧をまとった兵士が現れた。右足を引きずり、ガシヤガシヤと音を立てて。レイラの眉が不安そうに揺れたが、それを大丈夫と言つてごまかした。

柱の隅には使用人のヴァルトが私達を眺めている。こんな化け物を私が出したと言うのに無表情だ。全く可愛げのない奴だ。

『Olisi hyv? . Mutta min? korvauksia . (いいだろう。だが報酬はきつちりいたたくぞ)』
「Miten pid?n silit? . Hae ett? kulta ja hopea artaitalon .)
ああ、この家の金銀財宝を好きなだけ持って行け)」

私の言葉に満足したゼパールがレイラに手を伸ばした瞬間、ゼパールは何かを感じたのか、私を担ぎあげ後ろに飛びのいた。

レイラは突き飛ばされて地面に尻もちを付いている。一体何があったと言っただい？

「Zeparu Mit? tapah tui! ? (ゼパール何があつた!?)」

『Pitii olla paha olo . T?m? on veljeni , mutta ei koskaan l?hell? t?t? . . . (嫌な予感がしていた。だがまさかこんな近くに同胞がいるとは……)』

同胞?まさか……だがさっきの奴らは追い返した、ここにはいないはずだ。だとしたら使用人のヴァルトか!

奴がレイラに好意を持っているのは気付いていた、奴しか考えられない。奴がレイラを呪っていたのか!だからゼパールを見ても涼しい顔でいれたんだな?こいつも契約していたのか!

禍々しい黒い霧が包み込むようにレイラを覆う。悪魔が出てくる、一瞬でそれが分かった。

「Layla Menk? ? pois! On vaarallista h?nelle! (レイラ離れなさい!そいつは危険だ!)」

「Mitt? vaaraa? H?n oli minuassa
ojella minussa sinusta. (何が危険なの? 彼
は貴方から私を守ってくれていたのよ)」

レイ、ラ……?

目の前に現れたのはゼパールと同じく赤い鎧を身にまとった騎士だ
った。だがゼパールよりも遥かに威圧感が漂い、眼光も鋭い。

眼だけで殺せるとはこういう物を言うのだろう。

そんな事はどうでもいい。なぜレイラは逃げない? まさか嘘だ……
嘘だと言ってくれ!

「taika ei ottanut h?nt? oliin p
aholainen kanssa Solomon Beret
osaman. (我が魔術を跳ね返していたのは同じソロモンの悪
魔であるベレトと契約していたからだな) Beret oli
pois minun maaginen. (ベレトが私の魔術を
無効化していたのだ)」

「Ja meid?n pitik? sitell? ihm
sten el? samankaton alla... s
e on todella hauska. (まさか同じ屋根の下
に住む人間に私達2匹が契約していたとは……実に滑稽だな)」

そう言って笑つてのけるが、ベレトと言う悪魔は私を殺す気でいる
だろう。

どうなっていると言うのだ!? レイラはゼパールの魔術で私以外を
愛せなくなったのではないのか!?

「Vihaan sinua. Olette kaikkir
ikoin el?m?? (私は貴方が憎い。私の人生全てを壊
した貴方がね)」

「Leilia・・・(レイラ……)」

レイラは最初から“振り”をしていたのだ。私を愛した“振り”を……この悪魔に守られてまで演じていたのだ。どうしてこうなった……

「Minulla ei ole muuta vaihtoeh
toa, jos tiedossa. (知られちゃったのなら仕
方が無いわ) Mutta kosto ei ole vielä
? ohii. (でもまだ私の復讐は終わっていない) Bereto,
tyhjennys kikkimuiستoh?ne
st?. (ベレト、奴の記憶全てを抜き取りなさい)」
「Totesi. (了解した) Menneme Zeparu,
sill? Herra, sinun hautaaminen
a. (行くぞゼパール、主の為に貴様を葬ろう)」
「K??nnetty Ikanu kuollat??ll?
(ここで死ぬ訳にもいかぬ) Mutta ei ole muut
a vaihtoehtoa kuin paholainen.
(同じ悪魔だが致し方あるまい)」

剣を向けあう悪魔たちの後ろにいるヴァルトは冷めた表情で眺めていた。

こいつは知っていたのだ。私とレイラが悪魔と契約していた事を……恐らくレイラの契約悪魔から聞いていたのだ。

だからこいつらを見ても驚かなかった。最初から、何も知らなかったのは私だけ……

「Lauri're menossa, vain koska
en halua anteeksi miehens?. (行く
わよラウリ、夫だからと言って私は容赦しないわ)」

第8話 復讐は終わらない

「始まったな」

パイモンが一言つぶやいて緊張が走る。

俺は何も感じないけど、確実に何かを感じ取ったセーレ、ストラス、ヴアル、アスモデウスの表情が変わる。
多分悪魔が現れたって事なのかな？

8 復讐は終わらない

「どうすんだよ、でも門も閉まっちゃってるし……内側からじゃなきゃ開けないだろ？」

『そうですね、少し待っていてください』

ストラスが羽を広げて俺の腕から飛んでいき、内側から門の鍵を開ける。そっか、ストラスってこんな使い道もあるんだな。知らなかった。門を開けてパイモンが入る。でもここを入れたって屋敷の鍵がかかっているはずだ。今回はストラスだっけ入れない。

結局ここまでしか行けないんじゃないか？心の中の疑問だから何も言わないけど、多分パイモン達がやってくれるはずだ。

「漣、俺の傍を離れないでくれ。君は俺が守る」

「心配いらないわアスモデウス、漣は私が守る。あなたなんかの力は借りない」

「ヴ、ヴアルちゃん……」

ヴアルはアスモデウスを睨みつけて澗の手を取る。ヴアルの警戒心は相当なもんだな。普段のお気楽な姿からは想像もできないほど鋭い言葉を投げかけた。

それをアスモデウスは眉を少ししかめて聞いて、小さな声で「分かったよ」とだけ返事をした。でもアスモデウスよりヴアルが守ってくれた方が俺としても安心だ。やっぱりアスモデウスに澗は預けられない。

玄関の鍵は空いてる。中からは金属がぶつかる音が聞こえて来る。その音を聞いてビビってサーレの後ろに隠れた俺と、一歩下がった澗以外は表情を崩す事はなかった。

「やっぱり俺達の考えは間違いなかったみたいだね」

「そうだな、面倒な事になった……」

この事態をパイモンとサーレは何となくだが感じてたようだ。でも金属がぶつかるって事はラウリかレイラが悪魔に抵抗してたって事なのか。い、意味が分からない！分からない事だらけだよ！

『拓也』

「ストラス、話があんま見えないよ！訳がわからない……」

慌てて自然と大きくなってしまった声を聞いて、ストラスはまず俺を落ち着けてから言葉を紡いだ。中から聞こえる金属音で気が気じゃないけど、まず今の状況を理解しなきゃ、どうにもならない。

チラチラと屋敷に視線を送りながらも、耳だけはストラスの言葉に集中した。

『レイラにラウリが契約していた悪魔の影響が出ていないと言いましたね』

「あ、うん」

『私達の結論ではレイラもソロモンの何かしらの悪魔と契約している、そう結論付けました。恐らく今の状況はラウリとレイラの契約悪魔たちがお互いに戦っているのでしょう』

「それって……」

『ラウリはレイラを振り向かせる為に悪魔と契約し、レイラはラウリの契約悪魔の支配下に陥らない為に悪魔と契約した。ここまでお互いに騙し合う夫婦もそういないでしょうね』

じゃあラウリとレイラ、それぞれが悪魔と契約してたって事だよな……だからレイラに悪魔の力が効いてなかったんだ。契約してた他の悪魔が力を打ち消していた。

そこまでしてレイラはラウリと結婚したくなかったって事だよな？
そこまでして……

「でもどうしてそこまで……」

『レイラと言う女性を調べましたが、彼女の父親は小さな子会社を経営しております……その受注の8割近くがラウリの父親の会社が注文しています。彼女に好意を抱いていたラウリはそこにつけこんでレイラを脅し、無理矢理結婚までもって行った……しかしラウリの父親はレイラの父親の会社に注文するのを止め、結果レイラの父親の会社は潰れ、借金に苦しんだ挙句、借金返済の糧にする為に保険金目当てで父親が自殺する事態になっています』

目が丸くなった。レイラが悪魔と契約してまでラウリの支配下になりたくなかった理由……それはラウリが自分の家族を滅茶苦茶にした張本人だったからだ。

ストラスの話にアスモデウスの表情が変わる。拳を握り締め、辛そうな物になっていく……そっか、サラもそうだったんだよな。他の男と結婚したくないから、アスモデウスと契約した。結局いつの時代だって変わりゃしないんだ。

『その過去を調べた時、レイラが悪魔と契約していても可笑しく無いと思っただのです。ラウリの会社で働かさせられるのも彼女にとっては耐えられない程の屈辱だったでしょう』

どうしてそういう人間が存在するんだ。

そんな奴がいるから憎しみに走った人間が悪魔と契約する。その人間が起こした事件によって他の奴がそいつを憎む、連鎖してしまうんだ。

「恋は盲目”って良く言うわね。自分の幸せの為なら平気で他を犠牲にするんだもの」

ヴアルの言葉が胸に突き刺さった感覚がした。

パイモンが扉を開けるのを見て息を飲んだ。中がどんな状況が分からないけど、きっと泥沼っぽい感じなんだろうな。

ドアを開けた先はもう別世界だった。乱雑に物が散らばり、壁は剣によって切りつけられた跡がたくさん残っている。余りの状態に息を飲むしかない。後ろを振り返ったらヴアルと目が合う、ヴアルは頷いて溼の手を強く握った。

パイモンとセーレの後を進んで行ったら長い廊下の先に2人の赤い鎧を着た男が見えた。

間違いない、あいつらだ。

「ゼパールは分かってたけど、まさかもう片方がベレトとはね」
「中々手ごわいのに出会ったな」

セーレとパイモンがそう言うんだ。間違いない、あいつらは強いんだろう。足を引きずってる悪魔がゼパールって言ってたから見分けは

すぐについた。でもゼパールは結構傷を負ってるのに、ベレットの方はピンピンしてる。それを見るから相当強いつて言うのだけは分かった。

2匹の悪魔の後ろには倒れているラウリと、それを見下すレイラ。ラウリはピクリとも動かない。ラウリは一体どうなったんだ!？助けようとして走り出した俺の首根っこをセーレが掴んで後ろに追いやる。ちよっ首しまってる……

『Zeparu silt?, ett? on tappa. (ゼパール、邪魔が入った様だ) Voinsilti liikku a? Meill? ei ole tappaa heid? t. (動けるか? 奴らを排除しなければならん)』

『Olen menett?nyt?rkaisin sy, miksi taistella ja on kadonnut. Tehd? yhteisty??. (主を失った今、貴様と争う必然性は無くなった。協力しよう)』

2匹の悪魔が俺達に向き直る。レイラは何も言わない、完全に悪魔に任せている感じだ。

ゼパールとベレットはアスモデウスに視線を向けて顔を顰めた。

『Mennulos huhpuheidenseitem?n kuolemansynti? ihmisiin. (7つの大罪が人間の戯言に付き合うか) Hitto... (忌々しい……)』

『後悔はしてない。俺がどんな罰を受けようが君には関係ないベレット』
『小僧が……調子にのりおる』

何だか偉く上から目線だけど、このおっさんは一体何者なんだろう

か。かなりの猛者って感じだけど……
そんな事よりラウリは大丈夫なのか！？

「ストラス、ラウリは大丈夫なのか？」

「特に外傷がある様には見えませんが、恐らくベレットに何らかの魔術をかけられています。予断を許さない状況かもしれません」

「じゃあさっさと倒さなきゃいけないんだな。ベレットって強いのか？」

「ええ、上位の悪魔です。72柱の中でも古参に分類され、墮天使です。元の階級は座天使に所属していた猛者です。剣士ですが、相手の魔術を無効化する魔法に優れています。貴方の魔法は今回役に立たないと言っていていいでしょう」

まあ俺はいつだって役に立ってないけどさ。じゃあ今回俺は後ろで待機してていいって事なのか？隙を見てラウリを助けに行かなきゃいけない。ゼパールとベレットはパイモン達に任せてもいいよな。

漣の隣まで後退して状況を静観する。漣は一瞬心配そうな視線を寄こしたが、アスモデウスに再び視線を向けた、その表情は辛そうだ。ヴアルはその状況が面白くないらしい、険しい顔をしてる。

「ストラス、パイモン達がいづらを追い詰めたらラウリの所に行きたい。通訳頼むぞ」

「分かりました。しかし大丈夫でしょうか……ベレットとゼパールが相手では、パイモンとヴォラク、アスモデウスがいたとしても」

「7つの大罪なんだ。大丈夫だろ、あいつは」

「そんな事言わないで拓也。アスモデウスだって危険を冒してるんだから」

漣にぴしゃりと言われて少しだけ腹が立った。なんだよ、あいつは強いんだ。心配しなくてもすぐに倒してくれる。

返事をしない俺にストラスとヴァルが気まずそうに俺と澪のお互いに視線を送り合っている。そしてパイモンとヴォラク、アスモデウスが剣を抜き、ゼパールとベレトに斬りかかった。

足を引きずっているゼパールは動きが遅いし、ベレトにやられた傷がある。多分あいつはそんな大した奴じゃないだろうけど……ベレトが全く動かないのが気になる。

アスモデウスがベレトに剣を振り下ろした瞬間、ベレトが一瞬で剣を構え、簡単にアスモデウスの攻撃を防いだ。そして体を回転させる事で攻撃をいなし、カウンターの様な居合抜きをかました。

アスモデウスは急いで離れたが、袖が切れており、腕からは血が流れていた。

後ろから澪の悲鳴が聞こえたが、なんだかもう血ぐらいで騒ぐ事も無くなった。あの程度じゃ死なない、そんな冷静な事まで考えるようになった。やっぱりもう俺は普通じゃないな……こんな状況、前までなら悲鳴上げて泣き叫んだのに、いつのまにこんなになっただろう。

『流石だなベレト、相変わらず見事な居合抜きだ』

『小童が。7つの大罪とはいえ、我が力、十分通用する』

どうやらベレトは相手から斬りかからせてカウンター攻撃するタイプみたいだ。無駄に動かない分夕チが悪い。

『アスモデウス、加勢に回るか？』

『平気だ、先にゼパールを倒してからでいい』

パイモンはゼパールと戦っていた腕を止めてアスモデウスに向き直る。どうやらあつち余裕みたいだ。やっぱりベレトにやられてた傷が痛かったんだろうな。

ゼパールは既に立っているのもやっとの状態だ。容赦の無いヴォラ

クに追い詰められて、全身に傷を負いながらも戦っていた。

『憎らしゃ……憎らしゃ、主も守れず我は朽ちるか』

『所詮落ち武者みてえな悪魔だもんなお前！大人しく成仏しろよ！』

ヴォラクとパイモンに追い詰められたゼパールにアスモデウスを相手にしてるベレト、お互いに余裕がないはずだ。今ならいける！走り出した俺をゼパールとベレトが剣を向けたけど、そこはすかさず助け船を出してくれた。

悪魔たちの間をすり抜けてラウリを支え起こす。倒れている人間は全体重をかけてくるから上手く持ち上げられない。そんな俺を邪魔する事も無い、助ける事も無い、レイラはただ見下しているだけ。後ろからはガキンガキン剣がぶつかり合う音が聞こえてヒヤヒヤして集中できない。とりあえずラウリが怪我してないか確かめないと！ストラスが言った通り、外傷はない。気を失ってるだけなのか？一体何があったのか？

「En ole tehnyth? nellle mit??n.
(彼には何もしてないわ) Se on tuhlausta. (何しても無駄よ)」

レイラが面倒そうに告げて大げさに溜め息をついた。その表情には光がない。暗く闇に沈んでいるような感じた。どうしてこんな事を……でもラウリは死んでいる訳じゃない、ますます分からない。そしてレイラの後ろに俺達を屋敷の中に案内した使用人の姿を視界にとらえた。

そいつはこんな信じられない状況になつてるのに、表情1つ変えない。こいつも何かを知ってるんだろうな。今は早く悪魔を返す事だけに集中しなきゃっ

その時、ガシャンと言う派手な音を立てて、目の前にゼパールが倒

れ込んだ。どうやらパイモンとヴォラクがやってくれたようだ。後はアスモデウスがベルトって奴を倒してくれたら……

ベルトはやっぱり強いって言われてるだけある。アスモデウス相手によくやってるよ、でも流石に少しずつ苦しくなって来てるみたいだけど。

アスモデウスもベルトも所々に傷を負っている。でも2人は表情1つ変えない。それを澁が顔を青くして見守っていた。

お互いに距離を取って、再び剣を向け合う。でもゼパールを倒した事で手が空いたパイモンとヴォラクもそれに参加し、流石に3対1の状況じゃベルトも不利は必死だった。

どどん追いつめられて、最終的にはアスモデウスによって剣をはねられて膝をついた。

「ぐっ……くそっ」

「殺すのは本意じゃない。大人しくする事だ」

喉元に剣を突きつけられれば反抗する気力もない。とにかく早くこいつたちを返さなきゃ……そう思ってパイモン達に言われたまま召喚紋を描いて行く。

レイラは逃げない様にセーレが見張ってるけど、その顔には薄い笑みが張り付いていた。

意識を失くしているゼパールと悔しそうに膝を付いているベルト、流石に2匹相手だっただけにパイモン達も少し疲れたみたいだ。

「Anna kivi sopimuksen. (契約石を渡すんだ)」

セーレが手を差し出せば、レイラはクスクス笑ってセーレの手に契約石を差し出した。セーレが確認して、召喚紋に入っているベルト

に投げて渡す。

『拓也、あなたはゼパールの契約石を探してください』

「あ、うん」

ストラスに言われた通りゼパールの契約石って言われてる物を探す。するとポケットから緑系のバングルが出てきた。これなのかな？

「ストラス、これ？」

『はい、ヒスイのバングルがゼパール、オニキスのピアスがベレトの契約石です。これで地獄に戻せますよ』

恐る恐るポイツと契約石を召喚紋に投げて少し離れた所に避難。レイラは協力的だった、悪魔を返す儀式にも文句1つ言わずに黙って従った。でもその顔には未だに笑みが張り付いている。

ラウリは気を失っているから仕方がない。パイモンが儀式を行ったけど……どうしてレイラは笑ってる？罪悪感も無い、焦燥感も無い、一体何なんだ？

悪魔を返し終わって静寂に包まれた屋敷は不気味な雰囲気漂っていた。アスモデウスは遷を守る様に出で、ヴォラクが俺の盾になる様に前を出た。

その時、ずっと黙っていたレイラが口を開いた。

「T? ytyy sanoa kiitos. (お礼を言わなければなりません) Kiitos. Toivoot? ytttyv? tkiitos teille. (ありがとうございます。貴方達のおかげで望みが果たせました)」

「Mitt? sin? puhut? (何を言っている?)」

「Olen iloinen voidessani sanoa, ett? voimenoa. (厄介払いができて嬉しいと

言う事です) Nytt, hyv? saada omalla
avalla. (さあ、お帰りになってください) Ill
olistuu j?lkik?sitteily? (後処理は
私が引き受けましょう)「

レイラとの会話を訳してもらってヴォラクの後ろから静観する。レイラが警察に言おうとしている節は無い。だとしても何で笑える？パイモン達も警戒してたけど、余りのレイラの不気味さと自分の考えを表に出さない雰囲気、これ以上聞いても意味は無いと判断したらしい。何も言わずに踵を返した。

「え、帰るのか？」

「そうですね、帰りましょう。あまり関わらない方がいい……悪魔より悪魔の様な女だ」

「人間なんて所詮そんなもんさ。悪魔と天使の意志を半々で受け継いでる存在なんだから」

丁寧に俺達を見送ったレイラ、余りの冷静さがますます不気味だった。

そして翌日、パソコンで調べたフィンランドの記事でラウリが入院したけど命に別条はない。しかし軽度の記憶喪失が認められた、そう書かれた記事を見つけた。

記憶喪失と言っても日常生活に支障は無く、レイラの事も婚約の事もハッキリ覚えていたようだ。じゃあ一体レイラは何のためにラウリを攻撃したんだ。

「Olen kasvassa. (ふふ……全てが上手く行ってる) L?k?kritkertoiivat minulle
Lillianhyvin. (経過は順調だってお医者様が言

つてた) H? n on my? s tytyv? inen si
ihen, ett? (あいつもそれを喜んでた)「

「……Oikeasti. (……そうですか) Mutta se
on h? nen lapsensa t ai ehk? ei?

(でもそれはもしかしたら……)「
「Ei, (違う) t? m? lapsi on erillaine
nehdottomasti. Se vain osoitt
aa. (“これ” は絶対に違う。それだけはわかる)「

少しだけ膨れた腹を撫でる手は優しさを宿していない。狂気にも似た微笑みを張り付ける彼女は美しく、また酷く残酷なものであった。夫が襲われ、悲劇の妻となった彼女について回るのは同情と言う名の優しい加護。彼女はこの屋敷に守られて、外に出る事は無くなつた。

そして彼女は夫に対する復讐の第一歩を遂げた。目の前にあつた死と言う名の安楽で直結な復讐の道を取らず、彼女は何十年も先の死んでも死に切れないほどの復讐を与えようと決意した。

自らがこれから何十年も復讐心を覚え続け、流される事なく、罪悪感に駆られる事もなく。それに耐え抜いて最後の最後に復讐を果たすのだ。

そして今日、俺はここを出て行く。

「Mitten voit menn? ulos t? n? n? n?

(今日ここを出て行くんですってね)「

「Kyll? . (はい) Teimme t? m? n ty? n H
ashi Hazime tavua. . . olen sinit?
onnella. (元々この仕事はバイトでしたし……俺、

夢がありますから)「

「Se oli kuin maalari? (画家だっけ?) T
oivontotta. (叶うといいね) Toivon vai

n s i t ? . (それだけを願ってる) L ? y s i n l a p s i
o n o n n e l l i n e n j a s u l o i n e n . (そし
て可愛い子を見つけて幸せになってね) 「

彼女は残酷な言葉を平気で吐く。彼女を愛していた俺の気持ちさえ、
彼女はいとも簡単に見抜いて利用したのだ。そしてそれに気づいて
敢えて騙された俺は生粋の馬鹿なんだろう。

自らが永遠に忘れる事の出来ない過ちを犯し、さらに永遠に消せな
い証拠まで残してしまったのだ。でもそれでもいいと思えた、これ
で彼女の何かを永遠に俺の物にできると一瞬でも思えたから。

彼女は膨れた腹を撫でる。その目は慈愛など微塵も宿っておらず、
小さな小さな加護が必要な命さえ復讐の道具として見ているのだ。
これが壊れた女の最後の姿なのかもしれない。

「 J a t k a p e l a t a p a r i l ? h t i e n . . . p
a l j o n p a r e m p i . (これからずっとね……ずっと
いい夫婦を演じ続けるの) N o s t a n a a p u r u s t o n
E n e d e s k u t s u t t u p a r i t e h n e e n .
(おしどり夫婦って近所に言われるほど尽くしてあげるの) K e r
r o n h ? n e l l e , e n n e n k u i n s e k u o
l i i . (でもあいつが死ぬ前に教えてあげるんだ) T ? m ? l a
p s i e i o l e s i n u n , l a p s i o n t y ?
n t e k i j ? k o k o o l i t k o t o n a t y ? s k
e n t e l y . (この子どもはお前の子どもじゃないって、お前の
家で働いていた使用人との子どもだって) 「

ラウリが悪魔の力を借りて自分を愛でようとしている事に気付いた
彼女は逃げようとしていた所、都合良くもう1匹の悪魔と出会った。
そしてラウリの魔法を悪魔の力で跳ね返し、ラウリを愛している振
りをし続けた。そんな彼女にとって指輪の継承者たちが来たのは最

高の幸運だった。

ラウリの悪魔に対する記憶、自分に対する悪魔の記憶、全てを消去して貰い、悪魔を厄介払いできたんだ。彼女の望みは果たせたに等しい。

ラウリは自分が悪魔と契約していた事も、彼女が悪魔と契約していた事も記憶にない。愛する妻を守ろうとする善良な夫に変わるだろう。だが彼女は記憶を持っている、彼女は復讐を忘れない。

これが彼女の計画だったのだ。血の繋がっていない子供を夫の子供と偽って、溺愛させて、最後は血が繋がってないと言う事を自分が、相手が死ぬ前に打ち明ける。

彼女の望みは彼を楽に死なせない事。心が焼け死ぬほどの憎しみと絶望を与えながら殺す事。もう彼は安らかな死さえ約束されない。

一方的に愛を囁き、一方的に愛したつもりでいて、そして会社も全て奪われて人生を終えるのだ。

「Joten odota. (だからね、待っててね) Kunolen vapaa menem? ? n o malle paikkalleen. (自由になったら貴方の所に飛んでいくから) En tied? mit? vuosi kymment? my? hemmin, tuolloin tulkaa hajottaa aminun ex-vaimo. (何十年後になるか分からないけど、その時は奥さんと別れて私の元に来て)」

彼女の最後の投げ所が俺なのだ。

その言葉はどんな言葉よりも甘美で、それだけで全てを投げ捨てられる。

「Lupaan. (約束します) Kuntulin te ikki olette valmis... En valitta

o m a i s u u d e n j a k a i k e n , m i t ? v o
i t h e i t t ? ? p o i s k o k o p e r h e e n j
a p e r h e e n . (貴方が全てを終えて俺を迎えに来た時に
: 俺は家も家族も財産も何もかも全て捨てて貴方を選ぶと) C h i
m a s h o u h e l v e t t i n y h d e s s ? . (2人
地獄に落ちましょう) 「

2人ならどんな所でも怖くない。クスクス笑った彼女がこれほど美
しいと感じた事はない。

もう俺は逃げられなかったのだ。あの日、彼女をこの手で抱いた日
から。

それまでは普通の人間として過ごそう。そして貴方が迎えに来たら、
その時に全てを貴方に捧げよう。狂って堕ちて行くのも悪くない。

そう考えている自分が酷く滑稽だったけれど、不思議な事に後悔な
どは微塵も沸かなかった。

どうやら狂っていたのは彼と彼女だけじゃなく、俺もそうだったよ
うだ。

「 K u n a i k a t u l i , v o i s i n o l l a s i
n u n k a n s s a s i . . . U s k o n , e t t ? e n s
i m m ? i s t ? k e r t a a m i n ? t o d e l l a r
a k a s t a n t ? t ? l a s t a . (その時が来て、ヴァル
トと一緒になれたら……初めて私はこの子を心から愛せる気がする
わ) 「

「 M e t o o . . . e n s i m m ? i s t ? k e r t a a ,
t u n n e n , e t t ? l a p s e t v o i v a t t u n
t e a , e t t ? h e i d ? n l a p s e n s a . (俺も :
: その時に初めて、その子どもが俺の子どもだと実感できる気がし
ますよ) 「

その未来を願ってやまない。

第9話 勝ちたい

「再来年で閉校……」

校長先生の口から出た予想外の言葉に体育館がざわめき出す。

全校生徒数41人の小さな学校は今年ついに隣の学校と合併し、閉校することになった。

9 勝ちたい

北海道余市郡仁木町にある商業高等学校。全校生徒僅か41人の小さな高校。

再来年の春に他の高等学校と合併が決まり、この高校はもうすぐ閉校する。

その話を聞いて驚いていたのは自分だけじゃなく、他の奴らも驚きを隠せないようで少ない生徒達が広い体育館の中でざわめく声が聞こえる。

「そりゃそうだべや。こんだけしか生徒いねえし」

「俺の中学のダチも違う高校さ行つたしなあ……」

中には諦めてる生徒もいるけど、でもそれでも自分達の代に学校が閉校と言う衝撃は隠しきれない。

その話を聞いたのはお盆が明けて補講が始まって3日目の事だった。皆の空気が重い中、教室に戻った後、予定通り授業を迎え、そして予定通りに学校が終わった。

俺は部活に行くべくカバンを背負い、教室を後にする。

早歩きでグラウンドに向かう理由は焦り、この高校で事実上のラストチャンスが始まるんだ。もうすぐ秋大がある。秋大でいい成績をとれば春の選抜甲子園だって夢じゃなくなる。

もうチャンスは少ない、今年の秋大と来年の夏がこの高校で甲子園に行けるチャンスなんだ！

でも現実はその甘くない。

「おめえら……また部室私物化しとるんか」

「だってよおゝ部員4人じゃ野球できねえべや」

そう、今年の夏を1回戦負けした俺達は3年の引退の後、なんと部員が4人になってしまったのだ。元々3年入れても8人しかいなかったから1人剣道部から助っ人を頼んで今回の試合に参加した。

でも秋大まで5人も助っ人を頼むのは正直無理がある。

しかも合併が決まってしまった来年は新入生をもう受け入れないんだそうだ。それは仕方ないけど、そうしたら野球部に入部する1年生がいない。つまり人数が4人のままで夏の甲子園地区予選に出なければならなくなる。

そんなの無理に決まっている、だから皆やる気が無くなっているのだ。部室に置かれてある椅子に座って漫画を読んでいる奴にケータイをいじってる奴、更にはゲームをしている奴……先輩がいなくなつてから、完全にここの部室はこいつらの私物化していた。

その不甲斐ない姿に苛立ちが爆発し、与えられている部室の壁を叩いた。

「お前ら少しはやる気出せ！秋大さもうすぐやる！？」

「でも助っ人5人も手に入れたとこで、どうせ1回戦負けさあ」

「わかんねえ！ここは秋季道大会出場経験だった強豪校だったべ！？それがこんな地に落ちてちゃOBが泣くべ！」

「お前も過去の栄光縋りつくくなや、そんな俺らが生まれる前の話だべや。今のここは部員も揃わんで、大会1回戦負けの常連校さあ。今更頑張ってもいい結果でねえ」

漫画を閉じてそう言われたらカツとなつて、バットとミットとボールを持ってそのまま部室を飛びだした。でもポジションがキャッチャーの俺はピッチャーがいなければなんの練習もできない。

仕方なく壁当てをしていたら、ペットボトルを持ったマネージャーの香奈子が練習を見ていた。

「お疲れ」

「あ、おう……」

「また1人で練習？あいつら強制的にやらせればいいやん」

野球部のマネージャーの香奈子が少し怒ったように部室を睨んでいる。

でも強制的にやらせた所で身につく訳じゃない。それに野球部にいる顧問自体野球の素人だし、野球自体やった事がないって言うんだ。顧問も当てにならなければ、俺ごときが何を言っても無駄だろう。

秋大はもう2週間を切っている。それまでにどうやって人数を集めて練習を間に合わすかだ。

香奈子が何度もあいつらに声をかけると、暫くして面倒そうにユニフォームに着替えてやって来たけど真面目に練習する気配はない。もう嫌だ、お前達は野球したくて野球部に入ったんじゃないのか？確かに今の状況は絶望的だけど、なんでそんな簡単に諦められるんだ？俺はまだ大会に出たい。だって甲子園をかけた試合ができるなんて俺達にはこの大会しかないじゃないか。

高校卒業したらプロにでもならない限り甲子園の土は踏めない。

俺達はプロになれるほどの実力が無いんだ。だからこうして目指す

しかないのに……何で皆そう割り切れるんだ。

最初は違った、去年までは真面目だったんだ。俺達が1年で、まだ2年と3年がいた時は……部員は11人でギリギリだったけど、でも甲子園に行こうって頑張ってた。

対戦校のビデオ研究して、他の部活の奴らにバッティング練習とか手伝ってもらって……なのに何で今はこうなってるんだ。その2年と3年がいなくなって、今の野球部には俺達2年生が3人と1年は僅か1人。

なんでこんな事になったんだよ……

練習が終わってグラ整を終わらせた3人が先に帰って、香奈子も帰り、1人でグラウンドを眺めていた。

もっと強くなりたい、甲子園の土を踏みたい。俺達は来年3年になる。来年の夏の大会が最後の挑戦になる。

「なんで上手いかなえ……」

ポツリと漏らした言葉が半濁されて耳に届き、苛立ちが募っていく。俺は諦めたくない。甲子園に挑戦したい、行けなくたって挑戦したいのに……何が何でも、全てをかなぐり捨てても諦めたくない。

『汝の強い信念……我にも届いたぞ』

「え？……うあー！」

声が聞こえたと思って顔を上げた先にいた姿を見て驚いた。そこに立っていたのは明らかに人間の姿をしていなかったから。

意味が分からない！コスプレか、コスプレなのか！？

そう思っつて、まじまじとそいつを見たけれど縫い目などは一切無い。完璧に作られた着ぐるみなのか、それとも……俺は夢でも見てるん

だろうか。

余りの事態に驚いて声が出せない俺に、そいつは淡々と言葉をつなげていく。

『汝の願い、強き信念、強き想い、我は全てを聞き届けた。どうだ？ 汝、我と契約をする気はないか？』

「け、契約……？」

『如何にも。汝の望んでいた物……すぐに手に入るだろう。ソロモンの悪魔である我が力を貸せば』

訳の分からない事を言ってる動物の姿をした“それ”は、間違いなく現実に存在してる。

二足歩行で歩いてるし日本語も話してる。お面でもかぶってるのかと思えば、そんな感じでもない。じゃあ本当にこれは悪魔って存在なのか？ ソロモンの悪魔って言うてたけど……そんな普通の生活を送っていけば、まず聞いたことがあるわけが無い。

悪魔なんて漫画の世界でしか見た事がない、しかも大抵悪い奴でも目の前のこいつは……

拓也 side

「もうすぐ秋大だな！」

サッカー部に在籍してる藤森が嬉しそうにサッカーボールを磨いている。9月に入って学校も始まり、また面倒な毎日を過ごしている俺とは違い、藤森はやる気に満ちている。

秋大かあ……部活してる奴らが公欠とるから、また教室に活気が無くなるなあ。

……去年までは中谷も一緒に浮かれてたのに。

次第に表情が曇っていたらしい俺に立川が慌ててフォローした。

「ま、まあどうせサッカー部は1回戦負けだろうけどな。うち弱いし」

「なんだと!？」

「うちの高校強い部活あんまないし、皆がないのもぶっちゃけ1日だけって感じだもんなー」

立川が笑って藤森を茶化してるけど、それを一緒になって茶化す事が出来なかった。この中に中谷もいてくれれば何とかだったはずなのに。思わず零れた溜め息を皆が心配そうに眺めていた。

「悪魔？」

『はい、まだ恐らくですが』

暫くして秋大も始まり、教室に生徒がいなくなりだした日、いつも通り学校から帰った俺にストラスがそう告げた。

この時期に見つかるなんてまさか秋大関連!？」

「秋大関連か？」

『秋大?良く分かりませんが大会関連です。中谷と同じ野球部が契約しているとパイモンは踏んでます』

「え、俺マンション行った方がいい？」

『いえ、今日は大丈夫です。私が口頭で説明してもいいですし、パソコンで画像を見ながら説明してもかまいません』

どうやら今日俺が行く必要はないようだ。どうせ説明されるんならパソコンがあった方がいい。そう思ったからパソコンがある部屋に足を運び、電源を入れた。

パソコンが立ち上がる間、ぼんやりと考えていた。

中谷をいつになったら救えるんだろうと。パイモン達が必死で探し
てくれる、でもまだ見つからない。

そして溇とアスモデウス、溇はどうして契約しようなんて思ったん
だろう。アスモデウスが何を考えているか全く俺には分からない。

『拓也、パソコンがつかまりましたよ』

ストラスに指摘されて、慌ててマウスを動かした。言われた通り入
力して検索をかけると、数百件の記事が出た。ほとんど関係の無い
物や、ブログで書いてるだけの物もあるみたいだけど、その中の1
件をストラスは表示しろと促した。

それをクリックすると、学校の校舎の写真が出てきて、その下に野
球部について書かれていた。

「古豪復活、奇跡の快進撃。閉校直前の学校で過去の栄光を取り戻
せるか……なんだこれ」

『北海道の余市郡仁木町よいちぐん にきちょうにある商業高等学校の野球部の記事です。

この高校は再来年に隣町の学校との併合が決まっており、事実上閉
校する事になっています。この高校は野球で過去に秋季道大会出場
経験を持つほどの強豪校だった時期もあったそうですが、現在は正
規部員自体が4人、事実上廃部になってもおかしくない状況でした。
しかし助っ人5人を借りて大会に出てみれば、まさかの3回戦突破
の快進撃。閉校する学校の廃部寸前の野球部、更に野球に関してほ
とんど素人と言っているいい助っ人5人、監督は野球もやった事がない
国語教諭。これは奇跡以外言いようがありません。だから北海道の
ローカルニュースでは大きく取り扱われているのです』

確かに……中谷達だって毎日泥だらけで夜遅くまで練習して、秋大
優勝経験なんて1度も無い。

甲子園だってヴォラクの力を借りたあの1回きりだ。

それなのに素人同然の助っ人でこれは出来過ぎてる気もする。一体
どういう事だ？

「思い当たる悪魔はいるのか？」

『残念ながら今回は特定できませんでした。しかしきな臭い』

確かにね……これはパイモンが目をつけてもしょうがないって所か
な。

納得した俺はパソコンを閉じて後ろのソファに凭れかかった。

ストラスは俺の顔を覗き込み、首をかしげている。そんなストラス
に俺は胸の内を吐き出した。

「これからどうなんのかな」

『どうなる、とは？』

「中谷見つかんのかな。澪は大丈夫なのかな、アスモデウスと契約
してさ。ちゃんと笑って全てを終わらせることできんのかな」

『拓也、貴方は何があっても希望を捨ててはいけません。貴方自身
が希望なのですから』

「ん？」

『心に留めておいてください』

ストラスは難しい事言うな。そんなこと言われても今一理解できな
いし。

「すげえ！俺達3回戦突破だ！」

地元のニュース記事に写っている自分達の学校を見て皆が騒いでい
る。助っ人5人もそうだけど、俺達野球部員もモチベーションは上

がっている。それが本当のモチベーションなのかは分からない……
だってこいつらは操られてるから。

俺の言う事には絶対に従う。
騒いでいる皆から逃れるように部室から逃げて誰もいない場所まで
言つて、俺は小さく声を出した。

「なあ、ありがとう」

『それは我に言うておるのか？』

再び目の前にあの化け物が現れて俺を見つめている。黙って頷けば、
少し小馬鹿にしたように笑われた。俺そんな変な事言つたっけ？
目の前の化け物は何も言わないで、俺の望むままにしてくれている。
綺麗な宝石と引き換えに。この宝石が契約の証なんだと言つ。なん
か誓約書でも欠かされると思つてたから少し拍子抜けだ。

でもそのお陰でここまでこれた。まだ先は長いけど、このままだつ
たら絶対にいい線行けるはずだ。

「なあ、お前は一体何が欲しい？」

『我の望むものか』

「ん」

頷けばそいつはニヤリと笑った。

その顔が怖くて顔の口角が引きつったのを感じた。

『我の望みは汝に与えた物の大きさで変わる。汝の望み全てを果た
した後で我への等価交換の代償を頂こう』

「金とか無理だべ」

『何、簡単なものだ。すぐにでも差し出せる簡単な……』
「ならいいけど」

こいつが何が欲しいかなんて、今の俺には全くわかりやしない。

第9話 勝ちたい（後書き）

今回は本当に実在する高校をモデルにさせていただきました。

物語の背景と余りにもぴったりだったので：^_^；

野球の助っ人人数は高校野球連盟の規定とかなりそうですね。下調べをあまりしない状態で書いたので、不足している部分がありそうです。

第10話 結局1人だった

「すげえな、まだ勝ち進んでる」

ネットで調べてみたら、その高校は4回戦も突破したらしい。北海道にどのくらいの学校があるかは知らないが、4回戦まで行ったんだ。ベスト16程度は行ったんじゃないのかな？

『拓也、今日北海道に向かおうとパイモンが言っていました。支度ができたら行きましょう』

10 結局1人だった

「北海道ってお土産何があると思う？俺行った事ないんだけど。白い恋人でいいかな」

『何を言っているのです貴方』

少しだけウキウキしてる俺を呆れた目で見るストラス。

だってさ、しょうがないじゃん。こんなクソ暑い真夏の日本に戻ってきたんだ、あんな地獄から。悪魔を探すつつても北海道に行けるんだ。少しぐらい観光したって罰は当たらない。

でも向かう場所はかなりの田舎の様だ。えー札幌いけないのかな、俺札幌行きたい。

「でもさ、なんだかさ、中谷みたいだよな。契約者多分野球部だろ？」

『中谷？』

「中谷もさ、大会に出たいからヴォラクと契約しててさ、今回もきつとそうなんだろつな」

『高校生……いえ、彼らにとっては今まで生きてきた短い生涯の中で最も夢中になり、最もがむしゃらに励んだ事なのでしょね。遊ぶ時間を削って、寝る時間を削ってまで励むのですから』

運動してない俺でも分かる。中谷たち運動部がどれだけ大会のために頑張っていたのか、でもいかさましても勝ちたいって言うのはスポーツじゃない。偉そうに言うけどさ。

野球部員達の写真を見たけど、誰がどれと契約してるかなんて分からない。でも契約してるとしたらこの4人の内誰かってことだから、探すのは簡単でいいかもな。

「いつ行く？俺もう学校始まつてるから頻繁には行けないんだけどさ」

『そうですね……明後日はどうですか？休みでしょう？』

「了解」

「すげえ……俺たちがベスト32だってよ！次勝てばベスト16だ！」

雄太が拳を作って喜びをかみ締めている。野球部は遂にベスト32まで登りつめた。取材も日を追うことに多くなり、今日も地元の新聞社が部活の風景を撮りに来るらしい。

この小さな学校では俺たちはもうアイドル並の扱いだった。次の試合は全校生徒で垂れ幕を作って応援に行こうだとか、急遽応援部を作ったり、とにかく関心は全て俺たちに向けられていた。

顧問の教師も野球の勉強をしだして、ノックなどの練習を手伝ってくれるようになった。

これが俺が望んだこと。皆が本気になって取り組むこと。何か1つでもいい、何かこの学校で思い出が欲しかった。このメンバーで1つでも多くの試合をしたかった。でも今の状況は……

「じゃあな、また明日朝練な！」

雄太と手を振って別れて、向かった場所はバッティングセンター。ここで部活が終わった後、50球程度バッティングの練習をして帰るのが俺の日課だった。小遣いが尽きるまで、できるだけ足を運んだ。

この少ないメンバーでピッチャーは1人だけ。しかも1年生だ、俺たちが点をとらないと。

夜遅くまで練習して、日が暗くなりかけた頃に家に帰る。バッティングセンターは家と反対方向で、家に帰るには再び学校の前を通らなきゃいけない。自転車で学校の前を通ったとき、何気なくグラウンドを見たら、2つの影があった。

「ナイスボール！カーブ前よりずっと曲がるようになったよ！」

「マジっすか！？よっし、次の試合までには間に合わせるっすよ！」

グラウンドには1年生ピッチャー晃とマネージャーの香奈子がいた。香奈子はグローブを手に取り、晃の練習に付き合っていた。2人の姿を確認して慌てて自転車を止めてグラウンドに入る。2人はこっちに気づいて手を振ってきた。

「あ、キャプテン。どうしたんすか？」

「帰ったんじゃないの？」

まだユニフォームから着替えてない晃に、体操服のままの香奈子。

ずっと練習してたのか？荷物をグラウンドの隅に置いて、香奈子がらグローブを取り上げる。香奈子の手は真っ赤に腫れていた。いくらグローブをつけてても、強い球を取ったら、それなりに手は痛む。もう暗くなりだしてるし、照明がないグラウンドではもう今日は無理だろう。

「手、大丈夫か？」

「平気平気、弟に付き合っつてキャッチボールしてっから」

ああ、香奈子の弟って確か野球部だよな。香奈子は父ちゃんが野球好きだから影響されて野球好きなんだよな。だからマネージャーを申し出た。

晃だつて1人で残つて練習してるなんて知らなかった。こんなに熱心な奴だつたっけ。

「キャプテン、前の試合はすみませんでした。最後に打たれて……キャプテンがいなきゃ負けてました」

「気にすんな。それより練習しとんのか？」

「はい！次までにはカーブもつと曲がるようにします！絶対次も勝ちましょうねっ！」

そう言つて嬉しそうに笑つた晃に上手く笑い返せなかった。変な表情をしてたんだらうか、香奈子と晃が目細めた。

今日はもう帰れ。それだけ言つて逃げるように自転車に乗った。2人の顔を見れなかった。

俺は悪魔の力を使って皆に無理やり野球をやらせてる。あんなに笑つてた晃と香奈子も本心では練習なんか面倒くさいって思ってるに違いない。でも悪魔の力のお陰で楽しく感じてるんだ。

勝ち上がっていくに連れて不安と焦燥が押し寄せる。俺は皆に嘘をついてまで野球をさせて勝ちたいのか？

駄目だ、もう笑えない

拓也 side

「負けた？」

2日後、ストラスに言われた通りマンションに向かった俺に待っていたのは北海道の野球部が5回戦で負けたと言う物だった。

試合は今日の朝1番で行われたらしく、結構な大差で負けたんだそうだ。インタビューで涙を流している選手がネットの記事で映つて、正規部員4人だけでベスト32まで行った事を記者が褒め称えていた。

でも悪魔とまで契約してベスト32で納得するもんなのかなあ？変に勝ち進んで周りに勘ぐられたくなかったからか？それにしても中途半端だな。

「なんで急に……まさか悪魔との契約を切ったとか？契約者はどうなった！？」

「今回の試合に出たメンバーはこの間と同じだった。契約者が野球部員だったなら殺されては無いはずだけどね」

パイモンが何も言わずにパソコンで調べている横でセーレが安心させるように優しく答えた。殺されてないとしたら、どうして負けたなんて……

パイモンはパソコンを閉じて真剣な表情で顔を上げた。

「主、急いだほうがいいですね。仮に契約していたとしたら報酬を与えるのが今日のはず。嫌な予感がします」

「お前の嫌な予感、当たるから怖いよ」

早速向かおうって話しになった時にヴァルが戻ってきた。アスモデウスとシトリーとヴォラクは今日はいない。戻ってきたヴァルはすぐに状況を理解したらしい、俺たちについてくるって言ってきた。でも澪は大丈夫なのか？まあ場所も北海道だから距離的には大丈夫だと思っけど。

「澪はいいのか」

「……いいよ、アスモデウスがいるでしょ。どうせ」

少し投げやりな返事が返ってくる。ヴァルも澪が最近アスモデウスを気にしているのが気に食わないようだ。アスモデウスはまだこっちに慣れてない。色々助けるのは当たり前だけど、確かに俺も少し気に食わない。

いつもなら止めるんだけど、何だか止める気も起こらなくてヴァルも連れて行くことにした。ストラス達からいいのか？って聞かれたけど、いいや。ヴァルがいなくても澪はアスモデウスが守るんだろ？何も問題ないじゃないか。

ジエダイトに乗って向かった先は北海道の余市郡よいちぐん仁木町にきちょうって所。札幌とかと違い、特に何か目立った物があるわけじゃなく、のどかな田舎町って感じだった。

こんなところに悪魔と契約してる奴がいるとはなあ……本当に悪魔はどこにいるか分かんないよ全く。時間的には球場はもう第3試合をしている時間帯らしく、多分球場にはいないだろう。だとしたらミーティングの為に学校にいるか、もう家に帰ってるか。

とりあえず一度学校に向かうことにして、パイモン達が調べてくれた場所に向かう。ヴァルはその間もずっと不機嫌だった。

「なあヴァル、澪の様子はどうなんだ？」

「普通だよ、漣は優しいし。でもアスモデウスの事をいつも気にかけてる」

「まあサラの生まれ変わりとか言われたらなあ」

「拓也は気にならないの？」

気になるさ、漣が何か危険なことに巻き込まれてるんだから。でもアスモデウスに突っ込まれてから、それを俺が言う権利は無い。だってヴァルと契約させてしまったのは他じゃない自分なんだから。今更危険に巻き込むなって言うのは、アスモデウスが過去に俺に言ったとおり、調子が良すぎる。だから漣に危険が行かないように、俺が今まで以上に頑張らなきゃ。

返事をしない俺にヴァルは少しぶすくれてそっぽを向いた。なんだかあいつのせいで少しヴァルと漣はギクシャクしてるようだ。それに俺も含まれてるけど。ストラスたちが心配そうな顔をしてたけど、こればかりは本人の俺たちが何かする以外に解決法はないだろうな。暫く歩くと小さな学校が見えてきた。少し古びた校舎には人気は無い。もうミーティングも終わったのかもしれない。とりあえず中に入ってみることにした。

再来年に閉校になるだけあって、なんだか少しくたびれた雰囲気を感じ出している。人っ子1人いないから話しかける人もいない。そのままグラウンドの真ん中に向かって左の端に野球部と書かれた小さなプレハブ小屋が見えた。あそこが部室みたいだ。

誰かいるのかな？とりあえずここにいても始まらないから、部室に向かうことにした。ノックして誰も出なかったら、ここにはいないんだろうけどな。

『なぜ我ノカヲ使ワナカツタ？』

「……もういいよ、どうでも」

こんな事を俺は望んでたんだろうか。こんな空しい事を俺はしたかったんだろうか。やる気のない奴に練習させるように強制して、試合までこの悪魔にコントロールさせて、そこまでして俺は優勝と言う2文字が欲しかったんだろうか。

いや、勝ちたかった。試合には勝ちたかったんだ。皆で来年の甲子園を目指したかった。それが難しいって言うのも分かった。でも再来年の3月に閉校になるこの学校では来年の甲子園予選が最後の公式戦なんだ。

でも違った。俺は本当に皆で練習して、皆で笑って、皆で泣きたかった。こんな空しい勝利が欲しいわけじゃなかった。

悪魔にコントロールさせて好きでもない野球を好きと刷り込ませて練習させて、一体何がしたかったんだろう。そこまでしてでも勝ちたかった。そんな自分が情けなくて不甲斐ない。

涙が零れて、それを必死で拭った。目の前の悪魔は分からないとも言うように首をかしげている。

もういいよ、俺は諦めた。この悪魔と契約は失くす。それで皆が再び野球に興味がなくなっても、甲子園の予選に出れなくても、もう構わない。

俺だけ本気で頑張って、後のチームメイトは操られてる。なんて馬鹿らしくて滑稽なんだ。人形使いと人形のような関係だ。こんな空しい勝利いらぬ。

鞆の中から、こいつから貰った宝石を差し出す。そいつが小さな目を丸くしたのが視界に入った。でももう、俺には必要ないから。

「これ返す。ちゃんと助けてくれた報酬はやるけん、もういいべ」

『ホウ……マター人デノ練習ニ戻ルノカ』

「ああ、1人の練習は寂しい。んだども、今もどうせ1人だべ」

だって本当に野球をやりたいって思ってるのは俺だけだ。どうせ俺は最初から1人だった。どうしても変える事なんか出来なかったんだ。

宝石を返して、悪魔が次に開く言葉を待つ。こんな今まで信じたことも無い化け物と契約して、何だか不思議な気分だ。それも後ろめたい要因なのかもしれない。1人になってもいい、普通の人間に戻りたい。こんな空しいなら1人で壁相手に練習したほうがマシだ。

『ソウダナ……コノ程度ノ援助デハ大シタ報酬ハ戴ケヌナ』

「なんでだよ。お前のお陰で夢見られたんだよ。俺に出来ることなら手伝うよ」

『ソウカ、我ハ良イ契約者ト巡リ会エタ』

悪魔が笑った。元の顔が恐いだけに少しだけ後ろに後ずさった。でもこいつはいい奴だから、きつとそんな酷いものは要求しないだろう。でもそれを俺はすぐに後悔した。

悪魔は俺の両腕を手を取った。そして力強く握る。なんだよ、握手でもしたいってのか？

首をかしげている俺に、悪魔はさも当然そうに言い放った。

『デハ貴殿ノ両腕ヲ貰イ受ケヨウ』

「……へ？」

『魂ヲ渡スヨリハ安イデアロウ？相応ノ見返リダ。何、貴殿ノ魂ハ純粹スギテ我ニハ役ニ立タンノダ。ダガ貴殿ノ友ノ魂ヲ貰ウニハ相応ノ仕事ヲシテイナイ。ナノデ腕デ清算シヨウ』

「ふざけん、なよ……」

『フザケテ等イナイ。我ハ少シ腹ガ減ツテイル。人間ノ血肉ハ好物ナノデナ。貴殿ノ腕、腹ノ足シニサセテモラウ』

冗談じゃない！！そんなの受け入れられるわけが無い。

必死で振りほどこうと暴れたら、向こうはもつと腕の力を強めてくる。このままじゃまずい、本当に腕をもぎ取られる。

今まで感じたことも無い恐怖が襲い掛かり、なんとしてでも助かりたくなる。がむしゃらに暴れて、近くにあった椅子を蹴り飛ばして相手にぶつけた。その隙に一瞬弱まった腕から脱出して部室の扉を開ける。

その先には数人の人が立っていた。

拓也 side

「うおっ！なんだ!？」

部室の扉を開けようと手を伸ばしたら、1人の野球部員が飛び出してきた。ぶつかりそうになって、後ろに仰け反ったら、そのまま尻餅をついてしまう。え、何これ恥ずかしい……

でも気が動転してるこいつは俺に見向きもせず走り去ろうとしている。でもその腕をセーレが掴んだ。

「離せよ！なんだおめえ！」

「少し待ってくれ。大丈夫だ、君は俺達を守る」

「何さ言って……ひっ！」

小さく悲鳴を上げて、そいつが後ずさる。一体なんなんだ？そいつが向けている視線の先を見れば、目の前には端正な顔立ちの男が立っていた。なんだ、こいつにビビってんのか？見たところ普通の奴だけだ。恐い顧問かなんかなんだろうか？

男は俺達に愛想のいい笑みを浮かべて近づいてきた。

「その少年を渡してくれないか？素行が悪くて困る」

言い方も別に普通に優しい感じた。それなのに異常に怯えてる。――

体あいつはなんなんだ？その時、パイモンが悪魔の姿に変わり剣を突きつけた。

ちよっ！確かに周りに人いないけど、ここ学校！人が集まる場所なの！！

尻餅ついていた体を動かして、パイモンの腰に飛びついて必死で押さえようとしたりけど、パイモンから放たれる殺気が本物だと確信して、抵抗を止める。

「どういうことだ？」

『拓也、私達が探していた張本人に運よく会えましたね』

え、じゃあこいつが？

俺もソロソロと後ろに非難。ヴァルを盾にして隠れる。我ながら実に情けない。でも相手がどんな悪魔かも分からないのに、迂闊に近寄るのは危険じゃん、ねえ？

『見つけたぞオセー』

「……私の化け姿を知っておったか。面倒な奴だ」

次の瞬間、端正な男が一気に二足歩行してる豹の姿に変わった。それと同時にセーレに捕まっていた野球少年が悲鳴を上げる。まさかこいつ狙われてた？こいつが契約者なのか！？

少年はセーレから逃げようと必死でもがく。もう形振り構っていないんだらう、涙をポロポロ流してる。

「離せ、離せ！両腕を失いたくない！俺はまだ野球がしたい！！」

両腕を失う？腕を狙われてたのか？

オセーと呼ばれる悪魔に視線を向けると、満足げに微笑んでいる。でも姿が豹なだけに、かなりの威圧感がある。

『魂ヲ取ラヌダケ有難イト思ツテクレナケレバ。腕グライ差シ出シテモ良イダロウ』

「嫌だ！嫌に決まってる！！」

少しだけ読めてきたぞ。契約の等価交換って所か？そんなの止めさせなきゃいけない。

剣をオセーの首元に当ててパイモンが威嚇する。その姿を見て、オセーも俺達が力づくで行くって感じ取ったらしい。不快そうな表情をして後ろに下がった。

その手には大きな剣が2本握られている。

『鬱陶シイ奴ラダ。死ニ損ナイノ裏切り者ガ』

『死に損ないは貴様の方になる。覚悟を決めることだな』

ヴアルが慌てて結界を広げてくれたのに、少しだけ安心する。怯えている野球少年はセーレとストラスに任せるとして、俺とヴアルとパイモンで何とかするか。

恐いけど、やらなきゃいけない。どうせ逃げてたって、いつかはやらなきゃいけない事だから。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5646v/>

Ring Of Solomon ~ The Last Judgement ~

2011年12月9日01時15分発行